
哀川くんのネギま！？戦記

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀川くんのネギま！？戦記

【Nコード】

N2033U

【作者名】

駄猫

【あらすじ】

哀川くんが死んだのは駄女神の因果操作の所為！？
まあそんなこんなあつてネギま！？の世界に哀川くん参上！！
パートナーは打ち止めじゃなくミサカさん！！
前回の教訓を忘れない内に投稿した駄猫の2.5作目！

今回は転生じゃなくてトリップ!? (前書き)

前作の哀川くんは皆さんを不快にさせてしまいました。
申し訳ございません。

前回の教訓を胸に新しい哀川くんのネギま!? 戦記始まります

今回は転生じゃなくてトリップ!?

拓也視点

皆さんは天国って信じるか?

因みに俺は絶賛天国中だぜエ・・・

女神

「あの・・・すみませんでした!!」

拓也

「さっきからなんですかア？」

女神

「あのとき『フィアンマ』に倒される筈じゃ無かったんです!!」

拓也

「あの右手ヤローか・・・」

女神

「本当は皆さんと帰られる筈だったんです!」

拓也

「ふうん・・・まあいいぜエ・・・」

俺が逝くのは天国か地獄か幻想 か冥界か？」

女神

「幻 郷は東 じゃ無いですか!？」

拓也

「マジで何処逝くの俺はよオ……」

女神

「あの……この五枚カードの内の一枚のどれかの世界に逝っても
らいます」

拓也

「違う世界に逝くのはイインだなア……」

カードの中身はつと……

一枚目 銀色な魂の世界

二枚目 ポケットなモンスターの世界

三枚目 とある少女が電撃使って頑張る世界

四枚目 正義の魔法使いがたむろする世界

五枚目 未知の機械で無限の宇宙の世界

……む……5枚目がいいなア……

女神

「シャッフルシャッフル」

拓也

「シャッフルシャッフル じゃねエよオ!」

女神

「どれがイイですか?」

拓也

「ンじゃアこれで・・・」

・・・正義の魔法使いがたむろする世界・・・原作知らないんだが・

女神

「此度は本当にすみませんでした・・・」

次の世界では頑張ってください!!」

拓也

「まア・・・適当に頑張ってくるわア・・・」

女神

「何か有ったらいつでも私を呼んでください」

拓也

「何か有ること前提なんだなア・・・」

女神

「では行つてらっしゃいませ」

拓也

「おう・・・行ってくるわア・・・」

キイイ・・・ボタン

暗い・・・どっちに行けばいいんだア？駄女神よ・・・

アフターケア位していつてくれねエかなア？

まア・・・取り敢えず歩くかア・・・

それにしても暗エ・・・某うるさい星の奴らの面堂さんなら「言うだろオ・・・」

『暗いよ狭いよ怖いよ』・・・と

ロッカーの仲では無エンだがなア・・・歩いてる気がしねエ・・・

拓也

「暇だなア・・・」

ミサカ

「そうですね。とミサカは素っ気なく答えます」

拓也

「ン？・・・」

ミサカ

「どうしたのですか？とミサカは頭がどこか可笑しくなったのか？と心の中で笑いながら

訪ねます」

拓也

「えエと・・・何故テメエが此処に居るンだア？」

ミサカ

「私は貴方の案内を駄女神に押しつけられました。とミサカはメン
ドクセエと思いながら

答えます」

拓也

「テメエ何号だア？」

ミサカ

「私は駄女神によつて貴方の従者として生み出された・・・フム・

・

番外号と言うよりは特別号ですね。とミサカはうんざりしながら

答えます」

コイツ・・・毒舌すぎやしねエか？

アクセラレータ

取り敢えず、コイツは一方通行に關係がねエコトを知ったと言つこ
とで

良かったとするかア

拓也

「ミサカ・・・で良いのかア？呼び名はよオ」

ミサカ

「ええ。とミサカは何を当たり前のコトを言っているのかと心の中
で思いながら答えます」

拓也

「あのオ・・・俺の心がブロークンなんだがア・・・」

ミサカ

「そうですか。とミサカはどうでも良いので聞き流します」

泣いていいんだろうかア・・・

ミサカ

「取り敢えず道案内をします。とミサカは今から始まる旅にメンドクセエとの感想を持ちながら

案内します」

拓也

「・・・・・・・・誰か・・・・・・・・助けてくださアい!!」

ミサカ

「五月蠅いです。とミサカはうんざりしながらツツコミます」

拓也

「愛がねエ!!」

ミサカ

「知るか。」

拓也

「・・・・・・・・リアルに泣いて良いのかなア・・・・・・・・」

ン? どんどん光りが近づいて来たなア・・・・
新しい命って言うけどよオ・・・・この姿なら、トリップじゃ無エのかア?

ミサカ

「貴方の考えで合っていますよ。とミサカは地の文を読んで答えます」

拓也

「人の心を勝手に読むンじゃ無エ・・・」

ミサカ

「しょうがないでしょう、貴方とはめんどくさい回線が繋がって貴方の演算を助けているんですから。因みに貴方は今の所、某絶対可憐な子供達のレベル8を持っています。学園都市のレベル6より強いですね。とミサカは面倒臭い説明を終わらせ一息つきます」

ちよつと待て・・・絶対能力より高いって何だア・・・？

おいおい・・・前より規格外になってねエかア？

ミサカ

「前と言ったのが、あの途中でぐちゃぐちゃになったアレを指すならそうですね。と

ミサカは前回の駄猫を批判しながら答えます」

拓也

「メタな発現&駄猫を傷つけるのは止めようなア？」

ミサカ

「思っているコトが口に出てしまうので其れは無理ですね。とミサカは残念そうに

見えるように答えます」

残念そうに見えるようにって・・・
イコール全然残念じゃ無エンだなア・・・

拓也

「お、此処かア？」

ミサカ

「そうですね。とミサカは髪を弄くりながら答えます」

拓也

「暇なンだな・・・」

ミサカ

「はい。とミサカは即答します」

拓也

「此のドアかア？」

ミサカ

「ええ。とミサカは内心早く開けやがれと思いながら答えます」

拓也

「そうかよオ・・・まア、取り敢えずこれからよろしく頼むぜエ・・・ミサカ」

ミサカ

「仕方がないからよろしくしてあげます、拓也。とミサカは若干照れながら答えます」

照れ隠しってコイツにも可愛いトコあんだなア・・・

ミサカ

「私は貴方の心の中が読めるんですが・・・。とミサカは呆れながら場の空気を入れ換えようとします」

拓也

「ククツ・・・そうだったなア・・・じゃあ開けるぞオ」

キイイイ・・・

ま、まぶしいイ!!

目が！目がアアア！！

ミサカ

「何を馬鹿なことをやっているんですか？とミサカ呆れながら訪ねます」

拓也

「スマン・・・現実逃避してたぜエ」

・・・だつてさ・・・目を開けたら燃やされてる村だぜエ？
あの駄女神^{バカ}出すトコ間違つたンじゃア無エだろうなア・・・

ミサカ

「その可能性は大いにありますね。とミサカはあの駄女神^{バカ}を思い浮かべながら

相づちを打ちます」

拓也

「取り敢えず助けるかア」

ミサカ

「ええ。とミサカはやはり一方通行^{アクセラレータ}とは違つのだなと実感して驚きながら

も好感を持ちます」

拓也

「そら良かつたぜエ・・・ンじゃあ行くぞオ!!」

ミサカ

「はい！とミサカは駆け出します」

ユウナ・スプリングフィールド視点

ネギ

「ピンチになったらお父さんが助けてくれるんだ！！
お前みたいに正義の魔法使いを肩って呼ぶ奴になんか絶対に来ないんだ！！」

ユウナ

「ハイハイ・・・」

神よ・・・貴方は何故私をこんな所に産んだんだ・・・
生まれてくるとしても一般人が良かった・・・
畜生なんでこんな危機旗^{トラブルメイカー}乱立機の所に・・・
どうせなら拓也と同じ場所がよかった・・・

ネギ

「この・・・落ちこぼれ!!」

・・・ウゼエ・・・

「キャー!!!」

ユウナ

「ん!? 何だ今の悲鳴は!？」

ネギ

「そんなモノ聞こえない! お前は逃げる為の嘘をついてるんだろ!」

ユウナ

「しらね・・・私は諦めて大切なモン取りこぼすのは嫌だしな」

タッタッタッタ

なんか逃げるな! とか言ってるな・・・しらねえけど
今私は燃えた村にいる・・・

因みに私には前世の記憶が有る

私はフィアンマに殺された哀川拓也を呆然と見ていて其所を殺されたコトは

憶えているんだが、何故か私は野菜の弟になっていた・・・

普通妹に「落ちこぼれ!!」って呼ぶか?

姉さんはそんなこと言わずに守ってくれるけど・・・

実は裏では・・・って昼ドラみたいなのが有りそうで怖い

村で一人でも多く助けようとしているんだけど・・・

みんな何で「ネギくんじゃなくてお前みたいな落ちこぼれが!!」
って

言って聞いてくれないんだよな・・・魔法にそんなに価値が有るのか分らない

使えないだけで面汚しだぜ？泣けてくるわ・・・

しかも、悪魔襲撃の理由が野菜は関係ないように「災厄の魔女の娘の所為で！！」・・・

それ言ったらアイツも息子だろ・・・

ユウナ

「それでも・・・それでもみんなを助けたいって思った私って偽善者だよな・・・」

「生きてる奴はいるかア！！」

・・・今の声って！！

拓也視点

拓也

「うわ・・・酷エなみんな石ってよオ・・・取り敢えず生きてる奴探るかア」

ミサカ

「その方が合理的ですね。とミサカはこの状況をどうにかする方法を考えながら

その案に乗ります」

拓也

「生きてる奴はいるかア！！」

？

「え！？拓也！？なんで生きてるんだ！？」

拓也

「・・・もしかして・・・」

ミサカ

「上条優奈さんです。とミサカは駄女神の報告を受けて答えます」

拓也

「マジかよ・・・取り敢えず一人でも助けるぞ！！」

ユウナ

「今はユウナ・スプリングフィールドだ！あの雷は私の親父の魔法だ！

あそこに元凶がいる！其奴を倒せば石化が止まる！」

拓也

「ユウナ！お前も来るかア！？」

ミサカ

「おいていくより安全なので連れて行った方が良いでしょう。とミサカは生存確率

を計算しながら答えます」

ユウナ

「其所のお姉さんが誰かは気になるが分かった！」

拓也

「行くぞ！！」

ナギ視点

ナギ

「オラアア！！来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐。
雷の暴風」！！」

悪魔共

「ギヤアア！！ケイヤクガチガウゾォ！！」

ナギ

「・・・フウ・・・こちら辺にはもういないか・・・」

ユウナ？

「こんのクソ親父イ！！もっと早くに来やがれ！！」

？

「お前・・・親に言う態度じゃねエぞ・・・」

ナギ

「お前・・・ユウナか！？」

ユウナ

「ああ！来るならもつと早く来てくれ・・・」

ナギ

「そっちは誰なんだ？」

拓也

「其奴の連れの哀川拓也・・・ンで、こいつが」

ミサカ

「私の名前はミサカです。とミサカは赤毛のヒトに自己紹介します」

ナギ

「俺の名前はナギだ・・・すまなかった・・・ユウナ
一緒にいてやれなくて・・・」

ユウナ

「っと、それは野菜^{ネギ}に言ってくれ・・・取り敢えずアイツら悪魔の
この村を潰すっていうふざけた幻想をブチ殺しにいくぞ！！」

今回は転生じゃなくてトリップ!?(後書き)

どうでしたでしょうか?

拓也

「今回は頑張るンだろ?」

もちろん!あんなコトに成らないように今回はミサカさんとユウナさん

以外出す気は無い!

拓也

「ならいいじゃねエか・・・」

まアこんな駄目駄目な作者だが、よろしくやってくれ」

では次回もよろしくおねがいします!

ではB i s b a l d!

欠陥？そんなモノないですよ？とミサカは自分がレベル5なのを少し自慢します

台本書きなのが気に入らないヒトは今すぐ戻ってください！
何度言われても変えられないので・・・

主に力量不足で・・・

途中で誰が誰なのか分からなくなりますw

では今回も哀川くんのネギま！？戦記始まります

・・・また不合格だったぜ・・・

欠陥？そんなモノないですよ？とミサカは自分がレベル5なのを少し自慢します

拓也視点

ユウナ

「っと、それは野菜^{ネギ}に言ってくれ・・・取り敢えずアイツら悪魔のこの村を潰すっていうふざけた幻想をブチ殺しにいくぞ！！」

ミサカ

「では、一番槍いきますね。とミサカは超電磁砲^{レールガン}の準備をしながら宣言します」

拓也

「・・・マジかよ・・・コイツ・・・御坂美琴の技使えんのかよ・・・
・
良い方の誤算だぜエ・・・クッククク・・・やってやれミサカア」

マジで誤算だったなア・・・コイツレベル5とかよ・・・
あの駄女神・・・中々気が利くじゃねエか！

ナギ

「えと・・・超電磁砲^{レールガン}だったか？
其れって強ええのか？」

ユウナ

「あ、ああ・・・ミサカが使えるとは思わなかったケドな・・・
確か、軍隊一つ潰せる位だな・・・」

ナギ

「洒落にならなく無えか？」

ユウナ

「因みに拓也は世界一つ相手に出来る位だな・・・」

ナギ

「くうう！戦いてえ！！」

俺は戦いたく無いですわア・・・英雄相手はキツイしなア

ミサカ

「行きます！」

キュイイン・・・ドン！！バシユウウウ

拓也

「・・・消えたなア・・・悪魔共・・・」

ユウナ

「・・・わぁお」

ナギ

「俺の魔法より強い！？」

・・・駄女神エ

・・・どういことなンですかイ

コレがアイツみたいなバトルマニアだと言つことを想像するところええぞオ・・・

ミサカ

「次行きましょうか。とミサカは快感を感じながら促します」

拓也

「・・・ああ、そうだなア・・・」

ユウナ

「・・・い、行くぞ!」

ナギ

「お、おう!」

拓也

「何か赤髪のチビが泣き喚いてんだが・・・」

ユウナ

「あ、野菜^{ネギ}だ・・・」

ミサカ

「野菜^{ネギ}・・・とは？」

ユウナ

「私の愚兄だな・・・文字通り」

・・・コイツに此処まで言わせるってすげエなア・・・おい
コイツ余り好き嫌いしなかった筈なんだがなア・・・

ナギ

「お前・・・ネギか？」

ネギ

「おとうさん!!」

ナギ

「大きくなつたなネギ・・・」

余り俺には関係ないので飛ばすぜエ!!

ネギ

「おとうさん!!おとうさん!!」

あ、飛ばしすぎた・・・
まアいいか・・・

拓也

「おい!餓鬼!」

ネギ

「ひう!!」

拓也

「テメエ達の中で生き残りはインのかア?」

ミサカ

「・・・此の男の子を除いて二人ですね。とミサカはサーチ結果を報告します」

ユウナ

「なあ・・・私の右手で直せないのかな・・・」

拓也

「試してみる価値はあると想うぜエ」

ミサカ

「成功確率は五分五分ですが・・・貴方なら出来ると想いますよ。
とミサカは自分らしくもなく掛けてみたいです」

拓也

「マジでお前らしく無エな・・・」

ユウナ

「やってみる!!」

因みに野菜は気絶したままです

ユウナ

「……………行くぞ……………」

フウウ…………

ユウナ

「私は此処では落ちこぼれと呼ばれた…………苛められもした…………でも私はアンタ達を助けたんだ……だから…………だから…………」

私がアンタ達のその悪夢からすくい上げてやる！
テメエ達のその幻想^{のろい}をブチ殺す……！！」

ピキイイイン

村人A

「……………ここは……！」

村人B

「助かったのか……！」

村人C

「え……………君が助けてくれたのか？」

チンピラA

「落ちこぼれにd「ギャングァン、ギャングァンウゼェンだよ……………」ッガ」

拓也

「テムエ達を助けたのはな．．．其所にいるユウナ・スプリングフ
イールドなんだよオ．．．」

ミサカ

「此のチンピラ．．．どうしますか？とミサカは顔を踏みながら訪
ねます」

拓也

「捨てとけ」

ユウナ

「助けられてよかった．．．

私はもう後悔しなくなかったからな．．．」

村人C

「君がたすけてくれたのか．．．有り難う．．．

そして、今まで済まなかった．．．魔法というモノさしだけで計
っていた

本当にすまなかった」

ユウナ

「い、いや、私は好きに助けただけだから．．．」

拓也

「礼ぐらいもらっとけ」

やっぱりいい奴だよなア．．．悪く言つと甘過ぎだなア．．．
俺みたいな悪党がいた方が．．．

ミサカ

「貴方は悪党なんかじゃないですよ……。とミサカは心からの言葉を述べます」

拓也

「ハア……。お前もお前で……。ま、サンキューな」

ユウナ

「そっぴゃ、何処も気持ち悪いトコ無えか？」

村人D

「ハイ！」

ユウナ

「ん……。なら良かった……」

野菜ログインしました

ネギ

「あ！落ちこぼれ！！」

拓也

「（切れていいのかなア）……」

欠陥？そんなモノないですよ？とミサカは自分がレベル5なのを少し自慢します

真・恋姫蜀編クリアしましたw
最後微妙に感動したな〜・・・

拓也

「そついやさア、今日テストだったンだろオ？」

・・・なんのことでせうか？

拓也

「・・・まアイイ、良く無エがまア良い・・・
恋姫始めるとかいわねエよなア？」

ギクツ！？

では次回！

拓也

「逃げたな！？」

ではB i s b a l d！

切れないですよ・・・哀川くん（前書き）

今回は哀川くんの設定を書きます次回はユウナさんです
では今回も哀川くんのネギま！？戦記始まります

切れないですよ・・・哀川くん

拓也視点

野菜ログインしました

ネギ

「あ！落ちこぼれ！！」

拓也

「（切れていいのかなア）・・・」

ユウナ

「切れるのだけは止めてくれ・・・村に被害が出ちゃう」

ミサカ

「被害の大きさは超電磁砲レールガンの数倍になりますね。とミサカは洒落にならないので

本気で止めていただくことを推奨します」

・・・俺暴れてもそんなに被害出無エだろ・・・

ン？・・・さてよ・・・俺そっぴいレベルがやばいコトになっていたような・・・

今度無人島で本気を

ミサカ

「出さないでください。とミサカは自然保護を促します」

ネギ

「みんな無事なんだ・・・で、なんで落ちこぼれがいるの？」

ブチッ

村人C

「ユウナちゃんが助けてくれたんだよ・・・

命の恩人を落ちこぼれっていうのは僕は許さないよ・・・」

村人D

「皆、魔法が全てだと想っていたわ・・・でも其れより魔法より大切なモノがあったこと

を石化している中にユウナちゃんに教えて貰ったの・・・」

へエ・・・魔法の村にもこんな奴達がいんだな・・・

ちつと驚きだなア・・・正義語ってる唯のバカ共かとはっか想ってたぜエ

ミサカ

「・・・それは間違いじゃ無いですよ。とミサカは気をつけるように促します」

ン?・・・なんかいやがるなア・・・

ユウナ

「なんか嫌な感じがするんだが・・・」

バキィィ!!

MMの魔法使い視点

MMの魔法使い

「ucci、使えない悪魔共め・・・！」

殺つてやりましょう・・・

氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け。「魔法の射手・連弾・氷の17矢」

バキィー！！

MMの魔法使い

「ucci外れたか・・・なら！！」

拓也

「なら・・・なんだア？」

MMの魔法使い

「！？・・・なぜ此处にいる！？」

拓也

「バカめ・・・狙いを絞つて一発で仕留めなきゃなア・・・
こうやって居場所がばれるンだよオ」

MMの魔法使い

「グハ！！ち、畜生！！」

バケモノめ！！」

拓也

「はア？バケモノ？上等だぜエ・・・まア、俺から見たら、テメエ達魔法使いの方が
バケモノだなア・・・」

ミサカ

レイディオノイズ

「欠陥電気！とミサカは多種多様の技を使えることを自慢しながら
バ力を気絶させます」

拓也

「折角俺が血液逆流させてやろうと想ったのによオ」

ユウナ

「・・・それだけは止めてくれ」

「うち・・・折角実験が出来そうだったのによオ・・・
惜しかったぜエ」

ユウナ

「決して惜しく無かったぞ・・・」

拓也

「あ、そうだ・・・俺がな～で生きて～のか言っ
てなかったよなア？」

ミサカ

「其れは私の出番なので私が説明させていただきます。とミサカは
拓也の面倒事を受けるのが
仕事なコトを主張します」

ユウナ

シスターズ

「お前・・・妹達だったんだな・・・」

ミサカ

「いいえ、私は駄女神によって拓也の従者として生み出された特別

号ですね。と

ミサカは答えます」

ユウナ

「駄女神？」

拓也

「俺を殺した張本人だぞ」

ユウナ

「殺したのはフィアンマじゃないのか!？」

ミサカ

「フィアンマではあるんですが、本当は拓也は皆さんと帰れる筈だったんです。だから駄女神の所為だと 言っているのです。とミサカは説明します」

ユウナ

「・・・取り敢えず駄女神とやらが因果を変えてしまって、拓也が死んだ・・・」

コレでOKか？」

ミサカ

「ええ。とミサカは思考の早さに驚きます」

拓也

「コイツ頭はいいんだぜエ」

マジで頭は・・・なア・・・

コイツの性格は恋姫で言う、劉備

頭脳は同じく恋姫で言う、曹操って感じだなア・・・

知らない方はGoogleで、「恋姫 wiki」で調べてくれエ
・・・なんで今俺は言ったんだア？こんなコト・・・

ユウナ

「頭だけはって・・・失礼だぞ？私に」

拓也

「知るかよオ・・・」

「氏名」 哀川 拓也

「性別 身長」 男性 168cm

「属性」 善・悪・狂

「能力」 筋力：C 耐久：C

敏捷：C 魔力：x

幸運：A 宝具：EX(?)

「スキル」言霊：A 前兆の感知：A 直感：A カリスマ：A
反射：EX

「宝具」一方通行：EX

レベル6を越えている為、どんな能力や魔術でもベクトル変換できる。

「性格」戦闘中に感情が昂ると凶暴な言動や残虐な戦い方をしたり、敵を痛めつける際に快楽を感じる

ような危うい面も見せる。表情も淡々とした無愛想な物やしめつ面が多い。元はごく普通の少年だったが、夢で異世界の自分をみてしまい、他者へ感情を向ける事に非常に消極的になり、常に周りを拒絶する無関心で傍若無人な性格となるが、上条優奈めと出会ってからは、彼女を守るために行動しながら、徐々に他人への思いやりを示すようになっていく。今はツツコミ役など明るくなっている。

「容姿」一方通行

切れないですよ・・・哀川くん（後書き）

フハハw合格できた!!

拓也

「よかったなア・・・苦手な英語だったンだろオ？」

ういw

よかったおww

では次回もよろしくおねがいします！B i s b a l d！

かなり時間が飛ぶよ哀川くん（前書き）

今回、原作の直前まで飛ぶのですよ

所謂キンクリなのです

しゃべり方を変えたのはべ、別にひぐらしをやり直したからではないのです！

だらだらしてたら話が進まないなので今回の処置なのですよ

では今回も哀川くんのネギま！？戦記始まるのですよ にぱー

かなり時間が飛ぶよ哀川くん

拓也視点

どうもオ哀川だぜエ・・・

今回は駄猫の力不足の所為で・・・キンクリするようだ・・・

あきれたモンだぞオ・・・

つウ訳で・・・

『キング・クリムゾン』の能力の中では、この世の時間は消し飛び

……

そして全ての人間は、この時間の中で動いた足跡を覚えていねエッ！

『空の雲は、ちぎれ飛んだ事に気づかず！』……

『消えた炎は、消えた瞬間を炎自身さえ認識しない！』

『結果』ただだア！！この世には『結果』だけが残るんだア！！

魔帆良なう

ユウナ

「ついたみたいだな」

拓也

「そうだなア・・・」

この異常につつこんでいいのかア？

異常と書いてアブノーマルとは読ま無エぜ・・・めだかの箱じゃ無いからなア・・・

久々によもうかねエ・・・ジャン・・・

とLOVE ダーク ス・・・借りて読ンだが・・・アレは良いものだア・・・

ミサカ

「・・・このクソムシが・・・！とミサカは侮蔑の眼差しを向けます」

ユウナ

「この変態が！！アンリミテッド・変態・ワークスめ！！」

拓也

「変態！？・・・まア否定はセンよ・・・其れが俺だア！！」

ユウナ

「そのふざけた妄想ブチ殺す！！」

バキ！！

ミサカ

「雷符「欠陥電気」！！」

ビリビリビリ

拓也

「なんで……東方なんですかア？……」

ボタン

ユウナ視点

拓也がバカなので、ここから先は私ことユウナ・スプリングフィールドの出番だ！

因みに拓也はミサカに背負われてるけど……

いいな……私がもうちょっとでかければな……

• と言っても、10歳にして160cmあったら流石に引くよな……

ミサカ

「このヒト・・・寝ていたら可愛いですね。とミサカは心に萌えを感じます」

ユウナ

「む？寝ていなくてもイイぞお？拓也はなあ・・・」

長いので飛ばしますww

・・・そう想わないか？」

ミサカ

「そう言えば、この人自分のコトを悪やら何やらいつているのですが・・・」

一体何故なのですか？とミサカは自然に出てきた疑問をいいます」

ユウナ

「・・・その話は長くなるんだが・・・」

最初はただの普通の少年だったんだ・・・

まあ、人間は自分と違うのを嫌うんだが・・・アイツはどんどん仲間の輪に入っていったんだが

ある日夢で異世界の自分をみてしまい、他者へ感情を向ける事に非常に消極的になり、常に周り

を拒絶する無関心で傍若無人な性格となつたんだ・・・

多分異世界の夢の時に10000もの妹達を自分の為だけに殺してしまつたからだろうな・・・」

ミサカ

「・・・そう・・・ですか・・・。とミサカはあのときに少しほつとしていた理由が分かつた

のにもやもやした気持ちをもちます」

拓也

「おイイ・・・ユウナくウウン・・・誰が話してイイと許可わしたア？」

ユウナ

「知って貰わなきゃ駄目だろ・・・従者なんだしな？ユウナさんはそう想うんだが・・・」

拓也視点

目が覚めたので俺視点に戻るぜエ．．．

不満かア？

．．．いや．．．リアルに不満って言われたら立ち直れないから止めてくれ．．．

さてと．．．

拓也

「俺が悪党って言うてンのは．．．所謂ケジメであり、又鎖だなア．．．自分の中にいる

クロイケモノをつなぎ止めるためのな．．．」

ミサカ

「クロイケモノ．．．ですか？とミサカは疑問におもいます．．．」

拓也

「クロイケモノ．．．簡単に言えば狂気だなア．．．

例えば．．．だ、100人居るとする倒したい奴は1人な訳だア．．．

ソイツが許せない奴だ．．．とすると俺は周りを巻き込む確率がなア．．．

黒い翼状態といえばわかるかア？」

ミサカ

「歯止めがきかなくなるのですね。とミサカは返答します」

ユウナ

「あのときはそんなこと無かったよな・・・」

ああ、あのときって言うのは、私が誘拐されたときな」

拓也

「いや、俺は片方は四肢潰したし・・・もう片方は四肢を切り取ったからなア・・・」

しかも血液逆流もしたしなア・・・」

ミサカ

「そろそろ学園長室のようですよ。とミサカは報告します」

学園長視点

ふむ・・・今日ユウナくんが来る予定じゃったのう

護衛は二人つけるといつて居たが・・・何故声が震えていたのじゃろうか・・・

後ろでは子供が「落ちこぼれのクセに」と叫んでおったの・・・

あの子供がネギくんじゃろうか・・・

しかし・・・魔法がつかえないとは・・・

向こうの世界では「幻想殺し」「黒い死神の主」という二つ名がつくくらいじゃから

それなりに腕はあるのじゃろう・・・心配じゃのう・・・

拓也視点

えエと今ガングロサングラスがいるんだが・・・
コイツ、ユウナのこと嘲笑してやがったから・・・
つついっ手がつす
べっちまってよオ・・・

ガングロ

「貴様！！何をしたのかわかっているのか！？」

うざい予感がア・・・

．．．to be continued

かなり時間が飛ぶよ哀川くん（後書き）

駄猫いくのです!!

咲夜

「今回からコッチも担当することになったのかしら？」

いえ、違つのです・・・ちつとしたCMなのですよ
哀川くんの桜才戦記のですが

咲夜

「・・・」

黙り決め込まないでくださいです!!
はぁ・・・取り敢えず名前出せたから良いのです・・・
良くは無いのですが・・・

咲夜

「はぁ・・・こんなコトなら付き合いなればよかったわ・・・」

ううゝ・・・

オリハルコンのハートに傷がついたのです・・・

咲夜

「・・・次回「うざい予感は大抵あたる」よろしく願ひするわ
ではB i s b a l d」

うざい予感は大抵あたる（前書き）

今回はフルボッコするのです

とにかくフルボッコするのです・・・

自重はしないのです！（胸を張ってキッパリ）

うざい予感は大抵あたる

えエと・・・前회가中途半端におわっちまったので、前回のラストからだつてよオ

拓也視点

えエと今ガングロサングラスがいるンだが・・・
コイツ、ユウナのこと嘲笑してやがったから・・・ついつい手がすべっちまってよオ・・・

ガングロ

「貴様！！何をしたのかわかっているのか！？」

うざい予感がア・・・

ガングロ

「我々は正義の魔法使いなのだ！！貴様は我々をてk」

拓也

「てけとオに右フック」

ガングロ

「グボラ！・・・貴様！？・・・行くぞ！！」

正義の魔法使いA

「光の精霊１１柱。集い来たりて」敵を射て。」「魔法の射手・連弾・光の１１矢」！」

拓也

「ウゼエ」

正義^バの魔法^カ使いA

「なん・・・だと!？」

ボタン・・・

正義^バの魔法^カ使いB

「なら！風の精霊１１人。縛鎖となつて敵を捕らえる。」「魔法の射手・戒めの風矢」！」

はア・・・コイツ達ウゼエ・・・

どうしようかなア・・・

・・・ポクポクポク・・・チーン

よし！ミサカに任せて帰って寝よう

ミサカ

「嫌です。とミサカは拓也を盾にしながら拒否します」

ユウナ

「コイツ達運動神経無えのかなあ？さつきから肉弾戦がほとんど無い」

拓也

「戦つのはいいんだがよオ・・・別に・・・

命さえ残せばいいんだろオ？」

最近ミサカの毒舌でストレスたまってっからなア

ニイイ

未だマシな正義バの魔法使い視点カ

なんだ！？今の笑みは！？

「闇の福音」なんかより・・・

この寒気は・・・本能が逃げると言っているようだ・・・

拓也視点

おつ俺視点に戻ったよオだなア・・・
読^{かみ}者は言っていた・・・やる事は簡単「ずたずたに」と
なら方針は一つだア・・・

拓也

「テメエ達全員悪リイが・・・半殺しまでこっから先は一方通行だ
侵入は禁止つてなア！！オラアアア！！」

バキッ！・・・ズドオオオン

バ正義の魔法使い

「ヒイイ！？こんなバケモノに勝てるはずがない！！」

ガンゲロ

「なっ！？逃げるンじゃな・・・」

拓也

「なんだ？なんだよ？なんですかア？雑魚エ雑魚エ雑魚エよオ！！」

ズザザザ

ユウナ

「拓也をバカにするとはな・・・万死に値する」

ミサカ

「アレでも相棒なんで・・・バカにしてんじゃ無エよカス。
とミサカはウゼエバカを蹴飛ばします」

まるで地獄絵図じゃンw

やベエ・・・理性に歯止めがきかなくなってきたぜエ・・・
なんか制限つけるかア

拓也

「うっはア！綺麗にキヤラ崩れじゃ無エかア！
でもよオ・・・久しぶりの戦いあそびがこんなンじゃ面白く無エなア・・・

・
つウ訳でエレベル5までダウンってなア！」

え？未だオーバーキル？ここからは知ら無エし関係無エ・・・
ずったずたにしてヤンよオ！！

拓也

「行くぜエ・・・愉快に素敵にビビらせてやるよ」！

ガングロ視点

私の名前はガングロではない!!

拓也

「行くぜエ・・・愉快に素敵にビビらせてやるよ」!

この言葉でまた一人逃げていった・・・

ガングロ

「貴様ア!!!!!!」

学園長

「待つんじゃない!!ガンドルフィーニくん!!」

拓也視点

なんかぬらりひょんがきたンだが・・・

ぬらりひょん

「待つんじゃ！！ガンドルフィーニくん！！」

ヘエ・・・あのガングロ・・・ガンドルフィーニって名なのかア・・・

・
憶えておいて損しか無エがなア・・・

しっかしあのぬらりひょん・・・多分強いなア・・・

ガングロ

「しかし！？あ奴達は我々に攻撃をしかけてきたのですよ！？」

ぬらりひょん

「すまないが・・・君たちの名を聞きたい・・・教えてくれないかの？」

ユウナ

「私の名前は知ってんだろ？」

ぬらりひょん

「ああ・・・」

拓也

「・・・俺の名前は一方通行だア」
アクセラレータ

ミサカ

「私は欠陥電気です。レイディオ・ノイズとみン欠陥電気は答えます」
レイディオ・ノイズ

ユウナ

「・・・（おいおい・・・）なあ・・・私たちは一応客人として来
てるんだろ？」

ぬらりひょん

「・・・そうじゃの・・・」

アイツわざわざ客人を強調したなア

よくもまア・・・俺らに読心術使ってくれてやがんなア？

取り敢えず全員の分を反射してガングロに返した

拓也

「なら、コイツの嘲笑はなんだったんだろうな？えエ！？

テメエ達ふざけてんのか？あア！？私たちは其所の奴に呼ばれて
来てなんで不快にされたア？

くさってんのかア？いや、くさってんだなア何？俺たち何か間違
ったことしたかア？俺たちは　　わざわざイギリスから来てン
だぜエ？

其奴らが俺の連れ睨み付けて嘲笑・・・バカなんですかア？」

この挑発に乗って魔法一発撃ち込んでくれたら計画通りなんだが・・・

ガングロ

「貴様ア！言わせておけば！？」

ぬらりひょん

「やめんか」

ガングロ

「風の精霊１７人。集い来たりて…」魔法の射手・連弾・雷の１７矢」

おっコレで俺らの大儀名ぶ・・・

拓也

「チッ！避ける！ユウナア！！」

ユウナ

「うおおお！！」

ピキイイイイン・・・

あ・・・そういやコイツ幻想殺しついてたんだ・・・
ハズイハズ過ぎるウ！！

そんなコト言ってる場合じゃ無エなア・・・

拓也

「オーケエ・・・要するに歓迎する気は無いとオ・・・
よオし・・・帰エるぞオ」

ミサカ

「はい。とミサカはもう名前を隠す必要が無いので名前を出して返

事します」

ユウナ

「分かった・・・んじゃ帰るか」

ぬらりひょん

「馬鹿者！！！！！！」

済みませぬのじゃ・・・」

拓也

「も才いいわア・・・正義の魔法使いにはほんとと呆れた・・・

魔法が使えなかったら「落ちこぼれ」強すぎたら「悪」なアにが立派な魔法使いだア？

でも、組織の上に立つモンが土下座したンだからしょうが無エ・・・

・

一応居てやンよ・・・でもなア・・・次なンらかの接触を図ってきたらテメエ達全員

ぶっ殺すから」

？視点

「面白いのが来たな・・・しかも片方はアイツの娘と来た・・・
楽しみだ・・・」

天井亜雄

「ハッ、それは何をしているつもりなのだ？今更、お前のような者が」

「……、分かってンだよ。こんな人間のクズが、今更誰かを助けようなんて思うのは馬鹿馬鹿しい
ってコトぐらいよオ。まったく甘すぎだよな、自分でも虫唾が走る」

大体をもって、この世界の住人はいつもこいつも救いようがない、甘いだけで優しくない芳川桔梗、誰かを守ろうとした男に一瞬のためらいもなく鉛弾をぶち込んだ天井亜雄、そして一万人もの人間を殺しておきながら今更人の命は大切なんですとか言い出す一方通行。

こんな腐った世界の人間が、今更人に救いを求めるなんて、間違っている。人に救いを与えようと 思うなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。

そんなことぐらい分かっている。

こんな世界の住人だからこそ、痛いほどによく分かっている。

「けどよオ・・・このガキは、関係ねエだろたとえ、俺達がどんなに腐っていてもよオ。誰かを 助けようと言い出すことすら馬鹿馬鹿しく思われるほどの、どうしよオもねエ人間のクズだったと してもさアこのガキが、見殺しにされて良いって理由にはな ンねエだろうが。俺達がクズだって事 が、このガキが抱えてるモンを踏みにじっても良い理由になるはずがねエだろうが！」

何となく分かった。『実験』を止める為に操車場にやってきた、あの無能力者レベル0の気持ち。一笑に帰すほどの甘ったれな考えで命を賭けるにはあまりにもくだらない、妹達を助けると言う 理由だけで立ち上がってきたあの男。生まれたときから住んでいる世界が違うヒーローのように見えたが、違った

この世界に主人公なんていない。都合の良いヒーローなんて現れない。黙っていたって助けは来ないし、叫んだ所で救いが来るとも限らない。

それでも大切なものを失いたくなければ。散々待っていたのに助けがやってこなかったからと、くだらない理由で失いたくなければ、なるしかないのだ。

無駄でも無理でも、分不相応でも。

自分のこの手で、大切なものを守り抜くような存在に。

主人公のような、行いを

「確かに俺は一万人もの妹達をぶっ殺した。だからってな、残り一万人を見殺しにして良いはずがね エンだ。ああ奇麗事だったのは分かっている、今更どの口がそんな事言うんだってのは自分でも分か ってる！でも違うんだよたとえ俺達がどれほどのクズでも、どんな理由を並べても、それでこのガキ が殺されて良い事にな ンかならねエだろオがよ！！」

・・・実験場・・・

上条当麻

「歯を食いしばれよ、最強さいじやく」

「俺の最弱さいきょうは、ちつとばつか響くぞ」

拓也

「っは！？・・・久々に見たなア・・・この夢・・・」

神裂火織

「その、体で……戦うつもりですか？」

「……うる、せえよ」

神裂火織

「戦つて、何になるんですか？」

たとえば私を倒した所で、背後には必要悪の教会が控えています。

ネセサリウス

私はロンドンで10本の指に入る魔術師と言いましたが、それでも上はいるですよ。

……教会全体から見れば私など、こんな極東の島国に出張させられるような下っ
端にすぎません。」

「うるっ……せえつつつてんだろ！！」

んなモン関係ねえ！

デメエは力があるから、仕方なく人を守つてんのかよ！？

違うだろ、そうじゃねえだろ！履き違えんじゃねえぞ！

守りたいモノがあるから、力を手に入れんだろぅが！

デメエは、何のために力をつけた？

デメエは、その手で誰を守りたかった！？

だったら、デメエはこんな所で何やってんだよ！

それだけの力があつて、これだけ万能の力を持っているのに……

何でそんなに無能なんだよ……」

「人の、命で――遊んでんじゃねエええええええええええ
」

「ああ、俺は確かに不幸だった」

この夏休みだけで何度も死にかけたよ、

一度なんか右腕を丸ごと切断された事もあった。

そりゃクラスメイトを一列に並べて比べりゃ、

こんな不幸な夏休みを送ってんのは俺一人だろうさ。

けどな、俺はたった一度でも、後悔してるなんて言ったか？

こんなに『不幸』な夏休みは送りがたくなかったなんて言ったかよ

!

冗談じゃねえ、確かに俺の夏休みは『不幸』だった。

だけど、それが何だ？そんな程度で、この俺が後悔するとも思

「ってんのか？」

そうだ。

姫神秋沙を三沢塾から助け出したのは、上条当麻だ。

そうだ。

御坂妹を『実験』から救い出したのだから、上条当麻だ。

そして。

あの白い少女の笑みを守り抜いたのだって、恐らくは。

たとえそれが誰かに巻き込まれたものでも、
きっかけはほんの偶然が重なった『不幸』によるものだったとして
も、

その一点だけは誇るべきだ。
逆にゾツとする。

・・・・・・・・・・・・・・・・

もしも上条が『幸運』にもこれらの事件に巻き込まれなかった時の
ことを考えると。

「確かに俺が『不幸』じゃなければ、もつと平穏な世界に生きてい
られたと思う。

この夏休みだって、何度も何度も死にかけるようなものにはなら
なかったはずだ」

「けど、そんなもんが『幸運』なのか？

自文がのうのうと暮らしている影で別の誰かが苦しんで、血まみ
れになって、

助けを求めて、そんなことにも気づかずに！

ただふらふらと生きていることのふどこが『幸運』だっていうん
だ！？」

「惨めったらしい『幸運』なんざ押し付けんな！

こんなにも素晴らしい『不幸』を俺から奪うな！

この道は、俺が歩く。

これまでも、これから、決して後悔しないために！」

だから、邪魔をするな。

『幸運』なんて欲しくない。すぐ側でみんなが苦しんでいる事にも
気づけずに、

ただ一人のうのうと生き続けるぐらいなら、

『不幸』に苦しむ人々にいくらでも巻き込まれてやる。
だからこそ、上条当麻は言う。

「『不幸』だなんて見下してんじゃねえ！
俺は今、世界で一番『幸せ』なんだ！」

ユウナ

「っは．．．久々の夢だったな．．．」

記憶を消された姫・・・

白い翼の少女・・・

魔眼を持ちし少女・・・

誇りある悪の一人の吸血姫・・・

偽善使いの少女・・・

自分流の悪を持つ一人の少年・・・

本来あり得なかったモノガタリと正史のモノガタリが交差するとき・
・

新たなモノガタリが始まる・・・

プロローグ編

完

うざい予感は大抵あたる（後書き）

さて・・・と、次から魔帆良学園編なのです

因みに過去編・・・紅き翼編ですかねも有りますのですよ
次回 このモノガタリにネギって必要？

では次回もよろしくおねがいします！B i s b a l d！

教えて！哀川先生！！

哀川

「どオモオ教師役の哀川でエ
さてさて今回の質問はア？」

Q1 クロイケモノを抑えるとだしてましたけど

生徒会の方だと普通に翼だしていたけどどうしてですか？

哀川

「其れでは答えたいと思いまアす

先ず、あの世界では狂気を発動させるほどの力の飽和が無いんです
此処が例えリリカルだとしても狂気が発動するんです

とは言っても、「狂気を発動させる程の力の飽和」と言うモノが
分かりませんよねエ

前提としてマナが沢山有ると脳を保護しよオとしてリミッターが
外れちまうんですよ

マナの分まで演算は出来無エですからねエ

其所はどれだけレベルが上がろうと「反射」「ベクトル変換」で
魔法を反射は出来ても

所詮人間ですからねエ

自然のマナは無理です

つうか、やれるモンならやってますよオ」

Q2 能力はこの小説の方が高いんですから操れるんじゃないです
か？

哀川

「さつきも答えたよオに、前提としてマナが沢山有ると脳を保護しよオとしてリミッター

が外れちまうンですよ

マナの分まで演算は出来無エですからねエ

其所はどれだけレベルが上がるうと「反射」「ベクトル変換」で魔法を反射は出来ても

所詮人間が出したモノですからねエ

自然のマナは無理です

ただし自転の向きを変えることや、早さを変えることは楽勝です因みに時も操れます。あと、歳のすすみ具合・身体年齢なども変えることが出来ます

ま、所謂規格外ですねエ」

Q3 白翼を出す予定はありますか？

哀川

「此処はネタバレなんですア、
太っ腹な哀川先生は答えます
出ます

まア、出所やナンヤラカンヤラは言えないンですがア
出るとしても魔帆良編が終わってからですねエ

魔帆良編っていうのはア、三年になるまでですねエ」

アンケート

哀川

「さて・・・ネギ君は原作通りいかせたほオがイインでしょオかア？

1・原作通り出す

2・・・あれ？いない

3・ひょーいさせる（所謂・・・転生憑依）

どれがいいでしょうか？

因みに期限は魔帆良編の魔帆良祭でエス

転生憑依というのは・・・

死んだ三次元の人間が欲望にまみれて主人公になりたいと言って憑依して生き返ること

だと駄猫は思っています」

哀川

「今回はこんなモノですかねエ・・・
では、感想を書いてくださった

Accelerator様、西条玉藻様、ミア様

ご指摘してくださった

ライラ様

有り難うございましたア

時々こんな形で説明会やと思うんですけどその時はよろしくおねがい
しまアす」

因みに魔力、チャクラ、神力をマナとします

教えて！哀川先生！！（後書き）

はゝい駄猫なのです！

明日は学校休みなのです！！

拓也

「明日はキチンと更新すんだろオナア？」

応さ！

其れでは次回 このモノガタリにネギって必要？

よろしくお願いするのです！ニパー

では次回もよろしくおねがいします！B i s b a l d！

フッフ・・・僕も一般先生として出るのですww

このモノガタリにネギって必要？（前書き）

前触れもなくキティちゃんと接触なのです

このモノガタリにネギって必要？

拓也視点

拓也

「へエ・・・此処が

あの「闇の福音」の家かア・・・」

エヴァ

「貴様・・・何をしに来た・・・」

拓也

「見学？」

エヴァ

「何故私に聞く！？・・・む？貴様はあのときの男か・・・」

あのときつていつたらぬらりひょんとかガングロとか正義バカ共とやり合った時か・・・

ガングロ・・・またちよっかい掛けてくんならぶっ殺そオ・・・

拓也

「みてやがったのかア？」

エヴァ

「ああ見ていたぞ・・・」「戦うのはいいんだがよオ・・・別に・・・命さえ残せばいいんだろオ？」の
所からな」

拓也

「ほとんど始めじゃ無エか!？」

エヴァ

「其れで、お前は悪の魔法使いの所に居てて良いのか？」

うわゝなんか「ドヤ」って顔してやがるぜエ・・・

ここは弄ったほオがいいのかア？

まア・・・一度本音と嘘を混じらせていってみよオカ

拓也

「知ってるかア？俺も一流の悪党なんだぜエ

お前とは違って娯楽として10000もの少女を殺したしなア・・・

・ククッ」

エヴァ視点

拓也

「知ってるかア？俺も一流の悪党なんだぜエ
お前とは違って娯楽として10000もの少女を殺したしなア・
・ククツ」

娯楽として殺したなら何故そんなに悲しそうに嗤うんだ・・

エヴァ

「貴様・・私をなめているのか？」

この形でも私は600年生きているんだ・・
貴様の嘘ぐらい見破れる」

拓也

「しゃア無エ・・

俺はある日夢で異世界の自分をみちまつてなア

自分のレベルを上げるために10000もの妹達殺してしまった
んだ・・

手に感覚もあんだよ・・殺したときのな・・

まアそっからは大切な1を守るために一流の悪党を名乗って、関
係無い奴は

出来るだけ関わらないよオにした

今では一流の悪党つてのが俺の道しるべだなア」

貴様は貴様だろう・・その一言が出せなかった・・

私だつてそうだ・・吸血鬼になどなりたくなかった多分コイツだ
つてそうだろう

昔のままだったら安全に暮らせただろう・・

だが、私はコイツに「不幸だったな」などと言うつもりもない
大体をもってこの世界の住人はどうもこいつも救いようがない、
こんな腐った世界の人間が今更人に救いを求めるなんて間違ってい
る。

人に救いを与えようと思うなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがある。そんなことぐらい分かっている。

こんな世界の住人だからこそ痛いほどによく分かっている。

エヴァ

「貴様と私はどこか似ているんだろうな・・・」

いつの間にか自分が違う「モノ」になってしまった所とかな・・・

」

拓也

「ヘエ・・・アンタも望ンでなったわけじゃ無エみてエだなア・・・」

お前は自分を何ていつてンだア？」

エヴァ

「私か？私は「誇りある悪」を名乗っている
貴様も悪を名乗っているとはコレは・・・」

拓也

「運命つかア？ククク傑作じゃねエか」

エヴァ

「かもな・・・」

拓也視点

拓也

「あのさア・・・その身体に巻き付いている鎖っぽいモンはなんだア？」

エヴァ

「なに？其れは解けそうか？」

拓也

「やってみてやるオカア？」

エヴァ

「頼めるか？」

拓也

「いいぜエ・・・なんせ初めての本当の意味での同類だからなア」

エヴァ

「言い得て妙だな・・・ではよろしく頼む」

結構ウザッたらしく繋がってやがンなア・・・
此処は右に抜いて

エヴァ
「ンっ・・・」

此処は左に引いて

エヴァ
「う・・・ん」

此処を上で

エヴァ
「はふん／＼／」

最後にこオ!!!

エヴァ

「ンあああ……………」

拓也

「……………」

ピクピクして痙攣してるな……

なんか途中で喘いでたなァ……さて現実逃避はやめよオカァ……
先ずはこのロリっ子をベッドに…………と

エヴァ

「…………っは

魔力が戻っている……」

拓也

「おう・・・起きたよオだなア・・・
身体の調子はどオだなア？」

エヴァ

「すごぶるいいぞ・・・さて・・・あのじいじにべつ説明しようか・
・・・」

拓也

「・・・・あ、そオだ・・・この短剣もつとけ」

エヴァ

「なんだ？コレは・・・禍禍しいんだが・・・」

拓也

「それは裏切りの魔女と呼ばれるキャスターの生涯の象徴として具
現化した宝具であり、

刃に触れたあらゆる魔術による生成物を初期化する力を持つンだア
これによりサーヴァントとマスターの契約すら無効化することが
可能なやつだなア・・・」

エヴァ

「そんなモノ・・・何故持っている・・・」

拓也

「拾った」

エヴァ

「はあ！？」

拓也

「ていうか、先ず自己紹介しよオゼ・・・呼び方が分から無エ・・・」

エヴァ

「あ、そうか・・・」

私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「闇の福音」「人形使い」「不死の魔法使い」「悪しき音信」「禍音の使徒」

「童姿の闇の魔王」などと言われている元600万ドルの賞金首だな」

拓也

「俺ン名前は哀川拓也

二つ名は「一方通行」「白い悪魔」って所かア」

エヴァ

「なら貴様のコトは拓也と呼ばう」

拓也

「なら俺はエヴァと呼ばう」

エヴァ

「よろしくな・・・拓也」

拓也

「よろしく頼むぜエ・・・エヴァ

テメエがピンチになったら俺は直ぐに助けに行つてやる」

エヴァ

「同じく・・・だな」

ユウナ

「私の出番ンンンンン！！」

ユウナは家でミサカと二人でUNOをしていました・・・
なんでやねん・・・

このモノガタリにネギって必要？（後書き）

拓也

「エヴァ・・・か・・・」

ある意味同類ですしね・・・

フラグ建てますが（ボソ

拓也

「ン？」

なんでもないのです

ヒロインって誰がいいんでしょうか？

拓也

「千雨は確定なんだろう？」

リアリストは好きなのです

因みに現実見ずに攻撃魔法しかやらなかった野菜は大嫌いなのですよ

拓也

「ばっさりだなア・・・」

好きなモノは好き、嫌いなモノは嫌いなのです
途中から綾瀬は嫌いになったのですよ・・・

なぐにが魔法を教えてくださいですかつ！

拓也

「・・・まア自分の信念ならいいんじゃない無エかア？」

浅はかなり・・・正義の魔法使い

？視点

？

「はぁ・・・なんでここはこんなに異常なんだ・・・」

ここに来てからはよく考えるようになったんだ・・・

普通とは何だ？

異常とは何だ？

自分は普通ではないのか？

自分は異常ではないのか？

皆はここが異常だっっている・・・

ということは、私が異常なのか？

誰か・・・誰か教えてくれ・・・

拓也視点

拓也

「エヴァと親友になれたし・・・取り敢えず今の予定は無エなア・・・」

？

「はぁ・・・なんでここはこんなに異常なんだ・・・」

拓也

「どうしたンダア？気分でも悪いのかア？」

？

「！？・・・いえ、大丈夫なので・・・」

拓也

「そうかア・・・『普通』なら心配すると思うンだが・・・」

ピクッ

・・・今・・・普通って所で反応したかア？

？

「此処は『異常』だぞ・・・（ボソッ）

心配していただきありがとうございます・・・

それでは・・・」

拓也

「・・・（精神的に参ってるっぽいなア・・・少しでも安心できるなら）」

確かに此処は魔帆良の外から来た俺からすると『異常』だなア・・・」

？

「！？わかるのか！？」

ンお！？此処まで反応するとはなア・・・
もしかして・・・認識障害が効いてないのかア？

拓也

「あ、あア

・・・つらかっただろオ？誰にも信じてもらえなくてなア・・・」

千雨？

「・・・ああ

・・・幼稚園の時から何か変だと思っではいたんだ・・・
小学校に上がったとき、私は一度友達に勇気を出して聞いてみたんだ・・・

そしたら其奴達何て言っただと思っう？

「千雨ちゃんの方が異常だよ」「千雨ちゃん嘘ついてる」

だってさ・・・

だから・・・」

拓也

「・・・つらかったんだなア・・・取り敢えず部屋どこだア？
連れて行ってやる」

千雨？

「こつちだ・・・」

あア・・・聞くンじゃ無かったア・・・
後悔したわア・・・こんな事聞いちまったらよオ・・・

救い出したくなるじゃ無エかよオ・・・

千雨視点

初めてだった・・・

私以外にも此処を異常と思っているやつがいるなんて・・・
私以外にも私を肯定してくれる人がいるなんて・・・
だからついつい柄にも無く話してしまった・・・
今になって恥ずかしいとおもっている・・・

？

「あ、そういや俺ン名前いってなかったなア・・・」

千雨

「あ、そうでしたね・・・」

拓也

「そんな話し方じゃ無くていいンだぜエ

ま、俺から自己紹介をつてなア・・・

俺の名前は哀川拓也

好きなものは特になし

嫌いなものは浅はかさ、正義を自称する馬鹿だな」

正義を自称する馬鹿？

まあいいか・・・

千雨

「私の名前は長谷川千雨

好きな物、小さく無駄のない機械、普通

嫌いな物、人ごみ、予想のつかない事象、異常だな

哀川さんは何時ここに来たんだ？」

拓也

「俺は一週間位前だなア・・・
そう言えば、もォ一週間も経ってんだなア・・・」

拓也視点

拓也

「俺は一週間位前だなア・・・」

そう言えば、もオ一週間も経ってんだなア・・・」

感慨深くもなるぜエ・・・

それより・・・魔法云々の事は伝えたほオがいいのかア？

駄女神

（原作・・・といっても知らないと思いますが

ブレイクしてくれていいですよ

ちなみに抑止力などはこちらで食い止めるのでどうぞお好きに）

まアた前ぶれも無く出てきやがってよオ・・・

このタイミングで出てきたと言うことはOKサインって事だよなア・
・・

なら・・・！

拓也

「一つ面白いことを教えてやるぜエ・・・

聞るかア？」

千雨

「面白いこと？」

拓也

「判断は好きにしゃがれ・・・気違いと思ってくれても普通に信じ
てくれても

どっちでもいいぜエ」

千雨

「哀川さん・・・話してくれ・・・」

拓也

「なら話してやる・・・」

この世界には魔法使いつてゆうのがいるんだ・・・

まア、殆どの魔法使いが正義の魔法^{バカ}使いを目指しているんだ」

千雨

「バカ？・・・ああ・・・正義を自称する馬鹿な」

拓也

「そう、本当はマジステル・マジつつウ職業なんだがよオ、これ聞いてみな」

千雨

「ん？」

ジジジジ・・・

「我々は正義の魔法使いなのだ！！貴様は我々をてk」

・・・うざい予感は大抵あたるをリピート・・・

拓也

「ほれ」

千雨

「要するに、浅はかな正義を自称する馬鹿が嫌いなわけだ・・・」

拓也

「かく言う俺もおまえが言ってた異常だからなア・・・ククッ
どうする？」

ちなみに千雨には二つの道がある」

千雨

「・・・教える」

拓也

「了オ解

一つは俺と一緒に行くかだなア・・・

この場合のメリットは俺が守ってやること

デメリットは浅はかな正義を自称する馬鹿がちよっかいをかけて
きやがる事だなア」

千雨

「・・・んで・・・二つ目は？」

拓也

「記憶を消すこと・・・かつ、認識障害を聞きやすくすること

この場合のメリットは異常に関わらなくてすむ

デメリットはもし関わってしまった場合誰も守れないことだなア」

千雨

「・・・」

拓也

「答えはまた今度きかせてく

千雨

「あんたについて行く・・・あの話聞いてて浅はかなのに命は預けられないからな」

・・・れ・・・返答早すぎンだろオ・・・

まアいい・・・俺の仲間を紹介するわ・・・今度にな

あ、後これもつとけ」

千雨

「ん？・・・これアイギスの盾じゃ無えか！？」

拓也

「？・・・有名なモンなのかア？拾ったンだが・・・」

千雨

「ズコ！！おいおい・・・

あ、それとあたしのメルアドだ」

拓也

「お、そうか・・・俺のも・・・ほれ」

千雨

「此処があたしの部屋だ・・・」

拓也

「ン・・・そオか・・・じゃあまたなア」

千雨

「
・
・
・
・
うん、
また
な
」

浅はかなり・・・正義の魔法使い（後書き）

ムムム・・・

拓也

「どうしたんだア？」

ちつと難しかったのですこの話・・・

拓也

「どうしてだア？」

千雨の人物像がぶれにぶれたモンで・・・

拓也

「あア・・・おまえだからしょうがない」

・・・しょうがないのです

まあ多目に見てくださいなのです

では次回「継ぎ接ぎだらけの正義」

よろしくなのです

因みにテスト一週間前をすぎたのです
にぱー

しんでエ・・・

継ぎ接ぎだらけの正義（前書き）

ヤバイのです・・・ヤバイですよ・・・
期末なのです・・・ミスったら挽回さんの難しいですよ・・・
勉強しなきゃ・・・と、言いつつの更新です
赤点はとらないぞ！！

継ぎ接ぎだらけの正義

拓也視点

拓也

「お、そうか・・・俺のも・・・ほれ」

千雨

「此処があたしの部屋だ・・・」

拓也

「ン・・・そか・・・じゃあまたなア」

千雨

「・・・うん、またな」

拓也

「でで来いよ・・・ガングロ・・・
ずつつけて来やがってよオ・・・ストーカーですかア？このヤ
ロオ」

ガングロ

「私はガングロではなくガンドルフィーニだ！！
貴様は此処にいてはいけない悪だ！！」

・・・ここから出て行く気は無いのか？」

拓也

「ン？無エゼ？ンでなンだア？

自分に都合の悪い相手は悪にする浅はかな正義を自称する馬鹿達
？」

ガングロ

「・・・そうか・・・出て行く気は無いのか・・・
なら・・・これより哀川拓也と言う悪に正義の鉄槌を！！」

正義の魔法使いD

「死んでもこいつを倒す！！

来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。「闇の吹雪」
！」

正義の魔法使いE

「ああ！

氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け。「魔法の射手・連
弾・氷の17矢」

正義の魔法使いF

「やったか！？」

それは三下の死亡フラグだぜエ・・・

ガングロ

「気をつける！！」

拓也

「なんだア？今の・・・」

あれだつたら優奈の「そげぶ」のが効くぜエ？

あ、それと言ったよなア？

次なんらかの接触を図ってきたらテメエ達全員ぶっ殺すからつてよオ・・・

つウ訳で・・・さア・・・

殺して解して並べて揃えて晒してやんぜエ」

スパパパパ

ガンゲロ

「何ッ!？」

おおお・・・驚いてる驚いてる

やべエ・・・楽しくなってきたア・・・

面白くないからネタバレしよオかねエ？

拓也

「今使つてンのはなア・・・」

曲絃系つていうンだぜエ・・・」

正義^{バカ}の魔法使いG

「なら・・・」

魔法の射手 集束・雷の三矢!!燃えろ!!」

拓也

「バカかア？普通の系じゃ人切れないだろオ？（切れないことも無いがな・・・）」

正義^{バカ}の魔法使いG

「ひ、ヒイイイ死にたくない……俺はまだ死にたくないいいいいいいいい！！」

拓也

「ざアンねエンでしたア……ククク
また来世エ！！」

スパン

正義^{バカ}の魔法使い
「嫌だ嫌だ嫌だアあああ！！」

ガングロ

「ま、待て！！」

曲弦系の中に飛び込んで行きやがったぞオ……
あらら……真っ二つじゃねエか

拓也

「飛んで火に入る夏の虫ってかア？
はア……でもやっぱ俺にや曲弦系似合わ無エなア……」

友視点

潤

「友ちゃんに言われて来てみればなんだこの惨場・・・
しかも今系使ってる奴「人間失格」に似てないか？」

猫田 友

「『おいおい潤ちゃん・・・』 『似ているのは納得するけどさ・・・』

『アイツ僕様ちゃんともたちの作品だぜ？』 『強いに決まってるぞ』」

潤

「なあそのしゃべり方どうにかならねえか？イライラするぞ」

友

「『そうは言われてもなあ』『他の人がいる間はこのしゃべり方だぜ?』」

『打つのめんどくさいけどな』」

潤

「軽くメタ発言したな・・・」

さあ、この世界で君はどういう風に生きていくのですか？
前の世界では何も出来なかったみたいですけどね・・・

哀川拓也よ・・・

地獄という地獄を地獄しろ

虐殺という虐殺を虐殺しろ

罪悪という罪悪を罪悪しろ

絶望という絶望を絶望させろ

混沌という混沌を混沌させろ

屈従という屈従を屈従させろ

遠慮はするな誰にはばかりでもない

我々は美しい世界に誇れ

ここは死線の寝室だ、存分に乱れる死線が許す

友

「『そろそろ部屋にもどるかあ』『いくよ潤ちゃん』」

潤

「あいよ・・・」

拓也視点

拓也

「さて・・・残りはテメエ一人だぜエ？

なアにが正義の鉄槌だア？

それにてめえは誰であろうと悪にすんのかア？

違うだろオが・・・

先にいつといてやるテメエの行き先は地獄だア
テメエ達の仲間の元に送ってやる」

ガングロ

「つく・・・殺すなら妻に伝えてくれ・・・

「こんな夫ですまなかつた」とな・・・
・・・一っただけ聞かせてくれ、私は・・・いや私たちは間違っていたのだろうか・・・」

拓也

「俺が知ってる筈が無エだろオが
だがなア・・・俺はな・・・

俺の光が助け損ねた奴がいンなら俺は一人も余さず救ってみせて
って決めてンだよオ・・・

だからこそ俺は悪でいないといけないンでなア・・・
アイツに降りかかるすべての恨み、憎しみを受け止めるためにも
な・・・

じゃあな
」

グ
チ
ャ
!
!

駄女神視点

はぁ・・・拓也くんだんだん一方通行に似てきてますよ考え方・・・
あなたには支えがいるのだから頼っても良いでしょうに・・・
・・・はぁ・・・先が思いやられる・・・

ユウナ視点

ユウナ

[illegible]

ミサカ

「はあ……。とミサ力はため息をつきます」

継ぎ接ぎだらけの正義（後書き）

どうでしたでしょうか？

あれはオリキャラではなく僕の分身ととってくれてもいいのですよ
時々でるのです・・・

一応普通の先生なのですよ？あの二人

拓也

「今回なんか疲れたぜエ・・・
指がつりそだった・・・」

あはは・・・

ガングロの居場所には普通の魔法先生が入るのです

拓也

「さよおか・・・」

では次回「ようやく私の出番だ!!」
よろしくなのです

ようやく私の出番だ!! (前書き)

生物・保険は良かったのですが・・・

英語乙

はぁ・・・

では哀川くんのネギま!?! 戦記始まるのです

ようやく私の出番だー！

第三者視点

ユウナ

「あゝ久しぶりの出番だ〜」

ミサカ

「メタですね。とミサカは一応反応します」

ユウナ

「だってさあ・・・一週間ぶりなんだぜ？駄猫が期末あるから更新できなくなるしよ〜」

ミサカ

「・・・先生がきたようです。とミサカは返答に困ったので違う話にかえます」

因みに、今優奈とミサカがいるのは2 - Aの教室です。
補足で「継ぎ接ぎだらけの正義」の GANG ROY BENT との少し前です
千雨ちゃんは今日は早退したようです

友視点

友

「『どうも』『数学の時間だぞ』『早くさっきの時間の道具が
たづねろ』」

ユウナ

「友先生ってさ……本当に男なのか？」

まき絵

「確かに疑問だね」

友

「『こそこそ話するなとは言わないけどさ』『僕様ちゃんの時間
は止めようぜ』」

『ま、いいや』『んじゃ授業はじめるよ』

このか

「切り替えはやいなあ」

ユウナ

（激しく同意するけど喋ったら当てられちまうよな・・・たぶん）

友

「『んじゃ、P39の問い一を・・・』『誰かやりたい人いるかい？』」

『ま、いないだろうね』『今日は6月28日だから・・・』」

あ、そういやこのクラスの番号とか言ってなかったですよ？
というわけでうpするのです

1・相坂 さよ 幽霊なのです

2・明石 裕菜 バスケ部なのです

3・朝倉 和美 パパタッチなのです・・・どこの鳥と同

じ臭いがするのです

4・綾瀬 夕映 哲学者なのですかね

5・和泉 亜子 関西弁（？）キャラなのです

6・大河内 アキラ 母性が・・・母性がアアア

7・柿崎 美砂 唯一彼氏がいるのです

8・神楽 坂明日菜 実は・・・

9・春日 美空 シスターさんなのです

10・上条 ユウナ 幻想殺し・・・拓也^{ともだち}の相棒的な感じなので

す ロリコン？

11・絡繰 茶々丸 ロボット？なのです 因みに私の好きラン

クでは5位なのです

1 2	・釘宮 円	くぎゅ〜w
1 3	・古菲	戦闘好きなのです
1 4	・近衛 木乃香	占い好き 同じく5位なのです
1 5	・早乙女 ハルナ	もちトラブルメイカー・・・あと電波塔な のです
1 6	・桜咲 刹那	お嬢様アア・・・因みに4位なのです
1 7	・佐々木 まき絵	新体操・・・スゲエ・・・
1 8	・椎名 桜子	運E xなのです・・・魔帆良のサクラコ は化け物かッ
1 9	・龍宮 真名	タツミーかあいよいよ・・・3位なのです
2 0	・超 鈴音	チャオ リンシェンなのです・・・鈴音 ^{すずね}
	と呼んだ私は悪くない・・・	
2 1	・長瀬 楓	忍者なのです にんにん
2 2	・那波 千鶴	再び母性の固まりなのです
2 3	・鳴滝 風香	一方通行風に言うとガキなのです
2 4	・鳴滝 史伽	上に同じくなのです
2 5	・葉加 瀬聡美	まっどさいえんていすとなのです
2 6	・長谷川 千雨	ちうたんなのです・・・もち第1位なのです
2 7	・E v a n g e l i n e A . K . M c D o w e l l	
	キティちゃんなのです	2位なのです
2 8	・ミサカ特別号	うん可愛いよねミサカ・・・
2 9	・宮崎 のどか	ネギラヴァーズの一人・・・決意堅いので
	好きなのです	7位
3 0	・村上 夏美	なんか書くことあつたかな・・・？
3 1	・雪広 あやか	お嬢様なのです・・・シヨタコンでもあり ます
3 2	・四葉 五月	毎日飯作ってくれエ！！
3 3	・Z a z i e R a i n y d a y	なでてみたいおお・・・

以上なのです・・・

え？自分の考え出過ぎ？知らないねえそんなこと
うに・・・引つ張らないで潤ちゃん

友

「『28番いつてみよつか』『ミサカちゅってみよつ』」

因みに $2(x + y) + 3(2x + 5y)$ という式なのです

ミサカ

「 $8x + 17y$ です。とミサカは余裕の表情をします」

かぁいいよおおお！！

友

「『よく出来たね』『次は28・6で22番いつてみよつか』『那
波ちゅいつてみようぜ』」

『レッツGO！』」

今度はこの式 $5(x - 2y) - 2(2x - 7y)$

千鶴

「ええと・・・ $x + 4y$ です」

友

「『正解だぜい』」

ユウナ視点

友

「……………」『ごめんちよつと用事があったから』ちよつと自習ね』」

なにがあつたんだろ……

む？……拓也の殺気だよな……いくっきゃないか……

ユウナ

「私ちつとお花摘みに」

ミサカ

「私も。と一応言っておきます」

さっさと行くか

ガンダロ

「つく・・・殺すなら妻に伝えてくれ・・・

「こんな夫ですまなかった」とな・・・

・・・一つだけ聞かせてくれ、私は・・・いや私たちは間違っ

いたのだろうか・・・」

拓也

「俺が知ってる筈が無エだろオが

だがなア・・・俺はな・・・

俺の光が助け損ねた奴がいンなら俺は一人も余さず救ってみせる
って決めてンだよオ・・・

だからこそ俺は悪でいないといけないンでなア・・・

アイツに降りかかるすべての恨み、憎しみを受け止めるためにも
な・・・

じゃあな」

グチャ！！

ユウナ

「・・・おい拓也・・・」

拓也

「ン？・・・来ちまったのk」

バキッ

ユウナ

「誰が！おまえにすべて背負えと言った！！

私は・・・おまえの隣にいたかったんだよ！！唯それで良かったんだ！！」

拓也

「・・・なら・・・俺のいる意味無エじゃん・・・
殺さずにすむ筈だったとか言うンじゃ無エの？」

ユウナ

「私は上条当麻じゃない・・・私は上条優奈なんだ・・・

あんな事言えない・・・おまえは背負ってきてるじゃないか・・・

拓也・・・おまえは一方通行アクセラレータじゃなく哀川拓也だろ！
ならおまえは・・・」

拓也

「・・・すまねエ・・・先に家に帰らせてもらっ・・・」

ユウナ
「・・・・・・・・」

拓也視点

はア・・・俺どうしたらいいんだろか・・・
俺はもしかして全部背負うって言うのを理由にしてアイツの隣に
いたんだろか・・・
俺は・・・どうしたら・・・

ミサカ

「待ちなさい。とミサカは制止の声をかけます」

拓也

「お前までなんなんだよ・・・説教かア？」

ミサカ

「あなたは十分にユウナを守っています・・・でも、・・・でもパートナーって言っるのはお互いに頼るのではありませんでしょうか？」

私はあなたよりも、優奈よりも弱い・・・
あなたが何も出来ないと言うのなら私は何も出来ませんよ・・・。
とミサカは本音をくちにします」

拓也

「・・・お前にしちや珍しいな・・・意味わかんねエし・・・でもその言葉は良かったぜエ・・・
ンそオだな・・・これからは肩の力抜いていきつかア・・・
・・・とここで優奈とミサカ二人とも学校じゃなかったかア？」

ユウナ

「・・・あ・・・」

ミサカ

「あ・・・。とミサカは・・・はあ・・・」

俺のこと心配してくれたのかねエ・・・
ありがたいねエ・・・

今日の夜くらいにぬらりひよんに呼ばれるだろオナア・・・鬱だア・

ユウナ

「・・・拓也・・・これから頼ってくれよ？わたし達は仲間なんだからさ」

拓也

「・・・おうよ・・・」

ガサゴン

ダンディ

「・・・拓也くん・・・だったか？」

拓也

「ンだア？」

ユウナ

「高畑さんだったか・・・」

ダンディ

「君がころしたのかい？」

拓也

「そオだがア？」

ブオン

拓也

「いきなりナニスンですかア？」

俺になンか恨みでもあるンですかア？」

.
.
.
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

ようやく私の出番だ!! (後書き)

白い翼だせそうです・・・

ガングロの代わりの代役があ・・・

拓也

「・・・強引だなア・・・やり方・・・」

いいじゃん「しりあす(笑)」しかかけないおいらだし

では次回「ダンディは一応生かしとこ」

よろしくなのです! m () m

ダンディは一応生かしとこ（前書き）

今日のテスト・・・orz

まあ、気を取り直して

では哀川くんのネギま！？戦記始まるのです

・・・ユウナを優奈って書いてたのです・・・orz

ダンディは「応生かしと」

拓也視点

ダンディ

「・・・拓也くん・・・だったか？」

拓也

「ンだア？」

ユウナ

「高畑さんだったか・・・」

ダンディ

「君がころしたのかい？」

拓也

「そオだがア？」

ブオン

拓也

「いきなりナニスンですかア？」

俺になンか恨みでもあるンですかア？」

ダンディ

「君に同僚を殺されてしまったからね・・・」

・・・自業自得じゃね？

だつてさ、俺前来たときに確か・・・

「もオいいわア・・・正義の魔法使いにはほとほと呆れた・・・魔法が使えなかったら「落ちこぼれ」強すぎたら「悪」なアにが立派な魔法使いだア？」

でも、組織の上に立つモンが土下座したんだからしょうが無エ・・・

・
一応居てやんよ・・・でもなア・・・次なんらかの接触を図ってきたらテメエ達全員ぶっ殺すから」

つて言つたよな・・・

あれ？もしかしてダンディいなかった？

ボイスレコーダーに入れてなかったよな・・・

はア・・・話すのメンドイし、殺したらなんか言われそうだしよし、ついてきたら気絶させっかア

拓也

「ハイハイ・・・スミマセンねエ・・・
じゃあ・・・お疲れ様でしたア」

ダンディ

「逃がすと思うかい？」

・・・ユウナくん・・・君は何でこんな悪者といふんだい？
脅されたのかい？安心しなさい・・・僕のh」

バキッ

拓也

「ウゼエ・・・コイツだめだわ・・・色々」

ユウナ

「・・・この人、いやコイツも既に正義面してやがんのか・・・担任としても学校に中々来ないし・・・

正義名乗るなら自分の生徒をちゃんと見やがれ

あと、拓也を悪くいうな」

・・・そこまで真顔だと照れるぞ・・・

さて・・・と、コイツは一応生かしておこう

確か紅き翼っていうグループに入ってたって言うぐらいだし

殺したらそれこそ全世界が敵だらけになるしな・・・俺はイインだケドよオ

ユウナに無理させたくねエし、あとメンドクセエしメンドクセエし・・・え？メンドクセエが本音じゃないかって？

モチロン本音さア！

エヴァ

「・・・もう終わったようだな・・・」

拓也

「おうエヴァ」

ユウナ

「・・・闇の福音？」

エヴァ

「タカミチが来たと聞いたんだが・・・楽勝だったようだな・・・
あと、そののは誰だ？」

拓也

「あん時言っただろオ？大切な1だ」

エヴァ

「フム・・・なるほどな・・・

そう言えば紹介していなかったなコイツは茶々丸だ」

茶々丸さん・・・綺麗にお辞儀してやがるなア・・・

拓也

「こつちこそよろしくたのむぜエ」

ユウナ

「私はユウナ・スプリングフィールドだ・・・
よろしくな！」

ミサカ

「私はミサカです。とミサカは簡易的な自己紹介をします」

エヴァ

「（ピクッ）・・・ナギの娘か」

拓也

「コイツ娘であって娘じゃねエからな」

ユウナ

「ああ、私は前世の記憶を持つ所謂転生者だな」

拓也

「因みに俺も・・・まア、俺の場合はトリッパーだな
異世界人だぜ」

エヴァ

「フム・・・異世界か・・・些か信じられんが・・・
拓也が言っなら本当なんだろう」

ユウナ

「（ピクツ）へえ・・・拓也、私が知らないところでこゝんなに仲
良くなつてたんだあ

・・・後でO・H A・N A・S H Iシナクチャナ・・・」

拓也

「・・・ぼ、暴力はいけねエぜ・・・」

まア早く移動しよオゼエコイツの目が覚めるとメンドイ」

エヴァ

「なら私の家に来い」

移動中にダンディ（笑）復活・・・しかし、誰もいないようだ

エヴァ

「ここだ」

拓也

「邪魔するぜエ」

チャチャゼロ

「邪魔スルナラ帰レ・・・ケケケ」

ユウナ

「うお！？人形が喋った！？」

チャチャゼロ

「人形ガ喋ッテモイイダロウヨ・・・」

後、ソコノモヤシ」

拓也

「モヤシ言つな解すぞオ」

チャチャゼロ

「ケケケ・・・才陰デ動ケルヨウニナツタゼ
礼ヲ言ウ」

拓也

「ン・・・」

エヴァ

「あ、お前からもらつた裏切りの魔女の宝具のお陰で誤魔化せたぞ
礼を言わせてもらつ」

ユウナ

「・・・まあいいか・・・さてと、どうする？」

拓也

「すまねエが今日はココ泊まらせてもらつていいかア？」

エヴァ

「今日だけとは言わず何時までもいてくれていいからな」

拓也

「ヤベエ・・・なんか泣けてきたぜエ」

ユウナ

「あれだな・・・やったことが帰ってきたんだな」

やってきたこと？

俺がしてきたことといえば・・・

幻想殺し、一方通行を家に泊めたとか

遠坂凜をとめたとか・・・あ、そう言えばとめまくってるなア

拓也

「まア、外にマンションあつからなア

取り敢えず今日はいさせてもらっぜエ」

エヴァ

「そうか・・・残念だな」

ミサカ

「私は拓也の横で寝させていただきます。とミサカは先にとっておきます」

ユウナ

「っちよ！？ズリイぞ！！」

エヴァ

「なら私も」

ユウナ

「ナニイ！？」

・・・明日天気になあれ・・・

現実逃避は一時中断して、どうしよオ・・・理性クンが耐えてくれるかねエ？

やばくなったら逃げよオ。そオしよオ

拓也

「もオ寝させてもらっわ・・・演算してたから疲れちまったぜエ」

明日は図書館島だっけかア？をまわるオか
ではお休みなさい・・・

茶々丸

「ベッドで寝てくださいね」

拓也

「かアさん俺ソファーでイイってばよオ」

チャチャゼロ

「母サンツテナア・・・」

ダンディは一応生かしとこ（後書き）

感想書いてくださった方、ポイントをつけてくださった方
お気に入り登録してくださった方・・・

本当にありがとうございます！！

感動なうなのです！！

さて・・・

アンケートをしているのですが、

内容は

野菜は原作そのままでオツケーですか

1．原作通り出す

2．・・・あれ？いない

3．ひょーいさせる（所謂・・・転生憑依）
どれがいいでしょオカ？

因みに期限は魔帆良編の魔帆良祭です

転生憑依というのは・・・

死んだ三次元の人間が欲望にまみれて主人公になりたいと言って憑
依して生き返

ること

だと僕は思っています

今のところ

1が3で、2が1です

では次回「誰がアクセロリータだア!!」
よろしくなのです！ m (——) m

七夕記念 哀川ちゃんと愉快な仲間達戦記

拓也視点

あゝどうもオ

駄猫がとちくるって短編で七夕記念しやがりました
取り敢えず今回のゲストはア

桜才戦記より

天草シノ、七条アリア、津田タカトシ、萩村スズ、遠坂凜

ネギま！？戦記より

ミサカ、エヴァンジェリン、茶々丸、長谷川千雨、猫田友

共通で

俺こと哀川拓也、上条優奈

まア、だからといって何でも無いんだがこの話は両方にうつpされる
片方しか知らない奴もみれる
よオにするらしいぜエ

因みに俺は司会者役だぜエ

拓也

「じゃア・・・取り敢えず乾杯！！」

全員

「乾杯！」

拓也

「さて、どこに向かうとするかねエ・・・
まずネギま！？戦記のほ才行こうかア」

さて、駄猫が出られない理由つてのがあつてなア・・・

猫田友が一応アイツの分身らしイ、詳しいことは聞いてねエがな

拓也

「邪魔すンゼエ」

友

「『邪魔すんなら帰れ』『このリア充め』」

拓也

「あいよオ・・・って言い過ぎだろオが

吉本 喜劇でももつと優しいわ！！」

エヴァ

「やめんか・・・酒が不味くなる」

千雨

「未成年が飲むもんじゃねえだろ・・・」

茶々丸

「マスターは一応600歳を超えているので大丈夫です」

エヴァ

「一応とは何だ！！このボケロボ！！巻いてやる巻いてやるウウ！！」

茶々丸

「ああ／＼激しすぎます／＼」

拓也

「・・・ミサカどうやって収集つける？」

ミサカ

「さあ？とミサカはとぼけた振りをします」

拓也

「振りじゃねエか！！」

友

「『そんなにツツコンでしんどくない？』 『僕様ちゃんならしんどいよ』

『嘘だけど』 『学校ではボケキャラなんだよ』 『下ネタだけだね』

」

拓也

「『一々』 つけンじゃねエ！どこかなんたらボックスの大嘘憑きと似ていてうぜエー！！」

友

「『ねらってるんだよ』 『独特なほうが受けイイでしょ』 『どう思う？ミサカちゃん』」

ミサカ

「私的には、

全裸には萌えががないですね。服は脱がしても靴下は脱がしてはいけません。

たとえば太陽が西から昇ることがあろうとも絶対絶対これは萌え業

界の鉄則ですね。

ホモサピエンスと動物の違いは何ですか？そう、衣服の着用です。つまりヒトは衣服があつて初めてヒトなのです。

それを全部脱がすことでしか欲情できない貴様らはヒト以下ですね。

動物と同じですよ。制服系の御三家と言えは何ですか？

答えてみてください。

そうですね。制服、体操服、スクール水着ですね。

なおセーラーかブレザーかの好みの違いは制服にカテゴライズするものとしませう。

勿論、ブルマーかスパッツかの違いも同様です。

スク水も紺か白かの違いはあれどカテゴリーは同じ扱いです。

どうですか？これだけでも甘美な響きがするでしょう？

では貴方たち2人がこれらの内の一つずつが好みであったと仮定しましょう。

拓也、貴方は制服です。猫田先生、貴方は体操服です。

頭に思い描け、時間は3秒です。描けましたか？

妄想くらい自在に出来てください、気合が足りませんやり直してください。

では貴方たちの望む衣装が登場するHビデオがここにありませう、あると思ってください、

あると信じてください気合を入れなさい。

返事は押忍かサーイエッサーです。

馬鹿者それでも軍人ですか？よし描けたようですね次に進みます。

それらの萌え衣装が、

貴様らの馬鹿げた欲情に従い一糸纏わぬ姿にひん剥かれたと思つてみてください。

ですが、貴方たちよく考えてください。

全部脱いだらもうそれはコスプレHじゃないですよ？

最近そういう詐欺紛いなAVが増えているが実に嘆かわしいです。服を全部剥いたらもうそれは文明人ではない、動物です。全裸にしか欲情できない貴方たちは犬、猫ですね。

失せてください。ゲットバックヒアー！とミサカは固有結界してみます」

拓也

「なア・・・なんでアイツにパスしたんだア？」

友

「『さすがの僕様ちゃんでもさ』『激しく後悔しているよ』『」

・・・さて、次の所に行こうか

拓也

「やって来ましたア！桜才戦記！！」

凜

「なんでそんなにうれしそうなの？」

優奈

「さっきの見たらわかるぜ・・・私は激しく後悔した
知らないでイイ一面をみた感じだな・・・パンドラの箱？みたい
なもんだな」

・・・どちらかというところまではっちやけられると
もオどうでもいいよオに感じるぜエ・・・駄猫でさえやっちまった
っていつてたしな
それに比べてココはまだ良い感じだな・・・
タカトシは普通だし

タカトシ

「普通いつていわないで！！」

スズはちっこいし

スズ

「あんだとコラア！！」

会長は・・・まアいいか

シノ

「つく・・・なんだこの快感！！」

・・・

七条先輩はまだ常識人（笑）だし

アリア

「あらあら」

凜はツッコミだし、ツンデレだし、なんかつつかりだし

凜

「これは血なのよ・・・先代もその先代も・・・」

優奈はいろんな世界一緒だし

優奈

「そっぴゃ、二つは一緒だもんな」

拓也

「そっぴゃ・・・ほかの作者さんの見た駄猫がよオ

「東方かきたいな」とかバカなこと言っただけエ・・・」

優奈

「東方っていえばさ・・・

とあるひぐらしの漫画でさ、圭一がな

か、簡単に言うなー！！

あの技は自分でも簡単には使えない奥義中の秘奥義だぞ！

どのくらい秘奥義ってかというところ、使えば自分の命が絶命するた

め古代中国では極奥義と恐れられ、

武道家が死を賭して使う最後の究極奥義だったのだ！！

って言うてる割には飛燕、割りと何回も使ってたよな？

そこで出てきたのが残機制ではないかという説だ。

人の命は1つと言われているが、その反面、猫には7つの命があることを認めるように、

そもそも日本文化には残機制を理解した古典が少なくない。

そもそも残機制は古来のシューティングの基本だったんだ。何？

今でもそんなのは当たり前？

違っあああうッ！！

真の残機制とは、死亡時に決められた復活地点まで戻ってリプレイのことなのだ！

死んだその場で復活なのは一見残機制に見えて実はそれはバイタリティ制と変わらない！

このシューティングゲームとして当たり前かつ重要なシステムが、皮肉にもシューティング界のビッグタイトルにて崩壊するとは誰が予見したであろうか！

かつてシューティング界に金字塔を打ち立てたあのグラディウス！！

あのゲームは死亡するとパワーアップが全てゼロに戻り、しかも決められた復活地点まで戻されての再開になったため、高次元ステージともなると、

復活してはすぐ死亡、また同じ場所にまき戻されて死亡を延々と繰り返し、

残機数が何機あっても無意味じゃないかー！

これはハマリだー！！とハマリなる言葉すらも生み出したのだ！これに対して続編である沙羅 蛇は、何と当時のシューティングとしては斬新な、

その場復活という概念を生み出したのだ！

これならお子様でも安心さ！

どんなステージもボスも残機数とコンティニューの50円玉さえあれば誰だって力技で

クリアーできる！！

でもこの時点でゲームの神聖性は失われたのだ！

何度繰り返ししても勝てない敵、ボス、ステージ！！

それについて打ち勝った時の爽快感はまさに『ひぐらし』！

抗えぬ昭和58年の運命を打ち破った時の爽快感は、闘い 挽歌を2年以上も攻略し続け、

ついにクリアした時の爽快感にも似る！！

今時のゲームにこれほどの長期にわたって攻略意欲をそそられる

ゲームがあるだろうか？

いやないッ！！ それはなぜか？ 力技で誰でもすぐにエンディングが見られてしまうからだ！！

どんな無様なプレイであろうとも、一度クリアしたゲームは魅力が薄れてしまう。

そうして軟弱なプレイヤーはそのゲームの真の攻略を目指すこともなく作品に飽きてしまうのだ！

結局、この軟弱な時代を生み出したのは、他ならぬ軟弱なゲームーたちだったのだ！！

コ ミはそのミスを認めた！

その証拠に、グラディ スシリーズはその後の正当後継作ではその場復活制を廃止して

再びハマリシステムを復活させている！！

いやでも東方はその場復活でいいんです。

だってロイヤルフレアで死ぬ度にステージの最初に戻されてた日にゃ、

いつんなつたら妹さまに会えるんだー！！

未だ自力じゃ紅魔郷と妖々夢のエキストラのラスボスに会ったことないんですけどー！！

お願いですZ Nさん、エキストラステージでもコンティニューさせてください

力技でもいいから妹さまやゆかりんに会いたいんですうううう！！

というか世の中の人って何でみんなこうも簡単にエキストラをひよいひよい解けるんすかああ！！ 足りないのは愛か動体視力かりビドーかああ！！

あーもう次の東方オンリーでは撃つと動く人とお人形使いと貧血魔女の三角関係

サウンドノベルを書きたいいいいい、もちろん最後は惨劇でwて

へ！

どうっすか八咫桜さんBTさあぁあん！！！！　って言ってたんだが……

どうなんだ？」

拓也

「……お前もか！！！」

優奈

「なにがだ？」

……おい駄猫……これ以上やったらいろんな意味でこるぞオ

拓也

「わからねエンだったら別にいい」

優奈

「気になるぜ……」

拓也

「会長はゲームとかあんまりしなさそオだよなア」

シノ

「そうだな、私はあまりしないな……」

拓也

「してそうなの……タカトシ、優奈、凜ぐらいじゃね？」

タカトシ

「だろうね」

拓也

「そうこう言ってるうちに夕日しずんだな・・・」

因みにパーティ開始は16時だぜエ

駄猫視点

え？友じゃないのかって？

そうやねー敢えて言うなら何の能力もない平凡な少年ですw

・・・七夕が誕生日の人おめでとうございます！

今日が誕生日のひとはっ

夢喰いメリーの藤原夢路さん お誕生日おめでとう！！
インフィニット・ストラトス

ISの篠ノ之箒さん お誕生日おめでとう！！

TO LOVEる -とらぶる- のララ・サタリン・デビルークさ

ん お誕生日おめでとう！！

らき すたの柊かがみさん お誕生日おめでとう！！

らき すたの柊つかささん お誕生日おめでとう！！

遊 戯 王の海馬モクバさん お誕生日おめでとう！！

・・・ネギま！？のキャラは？生徒会役員共のキャラは？
残念・・・俺にはしらべきれませんでした・・・

と、言うわけでggggでしたが今回は・・・
つとその前に・・・

拓也視点

拓也

「ヘエ・・・意外と星って明るいなア・・・」

優奈

「そうだな・・・」

拓也

「あ、そついや優奈はもオ短冊かいたかア？」

みんなエヴァのお酒を飲んで落ちてるぜエ

優奈

「・・・・・・・・ん？ああ・・・・書いたぞ」

拓也

「ほオ・・・・どんなコト書いたンだア？俺に教えてみ？」

優奈

「え、嫌だよ／＼／べ、別に拓也とずっと一緒にいたいなんて書いてないんだからな！！／＼／」

拓也

「・・・・・・・・これが萌えか・・・・・・・・（ブハッ）」

優奈

「え！？ちよっ！？拓也！？」

拓也

「時が見えるよララア・・・・」

優奈

「誰だよ！！・・・・・・・・折角二人きりだったのに・・・・・・・・不幸だなあ・・・・」

拓也

「・・・・・・・・我が生涯に一片の悔いはねエ！！（ハ　ハ）b（鼻血だしながら）」

駄猫視点

まあ最後の最後までgdgdでしたなあ（´-`-、）
まあ、番外編なんであんまし気にしないでください（´-`-、）
ノ
では次回・・・

グサッ

ゲフ・・・何故・・・何故咲夜さんがここに！？

咲夜

「私の出番が無かったからよ・・・
では次回もよろしく願いしますわ・・・

駄猫・・・ちょっとこっちに来なさい」

七夕記念 哀川さんと愉快な仲間達戦記（後書き）

はあはあ・・・死にそうになった・・・

あれならまだ魔砲のほうがいいですね・・・

ゲフッ

・・・お休み・・・咲夜っしゅ・・・

アクセロリータじゃねエエー！

拓也視点

えエ・・・タイトルで言いましたようにイ

俺はロリコンじゃねエー！！ンですよ・・・

エヴァ、ユウナというからって、俺は決してロリコンじゃアねエです！

まア、両方とも幼児体型なんだがなア・・・

後、俺はエヴァを15才まで身体年齢を上げれるぜエ

え？15才以上は駄目かってエ？

・・・一応あの子中学生だかなア？怪しまれるだろ？では、ついったー的に言っと・・・

エヴァログハウスなう！

拓也

「ふああア・・・まだ6時かよ・・・

しょうがない「ラストストーリー」でもやっとくかア・・・」

みんなはまだ就寝中のよオだからなア・・・

何故分かるかってエ？

それはな・・・

みんなで川の字＋一画してるぜエ！！

・・・orz

さてと・・・今どこだっけ・・・

おおぅ！？ザングルグ終わったンだった・・・

エンディングじゃねエンだなア・・・まだ・・・
（ネタバレ）が真のラスボスかよ！！
えエ・・・エルザ可愛そうじゃん・・・

と、そんなこんなで7：00になつたぜエ

途中からチャチャゼロと一緒に「モンハン」だつたぜエ

さて・・・と茶々丸は起床、ユウナも起床、エヴァも・・・あれ？
起きてねエ・・・

兎に角起こしにいくかア・・・

拓也

「おい！エヴァ起きやがれエ！朝だぞオ！・・・
エ・ヴァ！オ・キ・ヤ・ガ・レ！・・・
はア・・・もオいいわア・・・限界・・・

出てこい！お玉にフライパン！！・・・
秘技！「地獄の目覚まし」！！！」

「グアアアアン！グアアアアン！ガン！ガン！」

エヴァ

「五月蠅いわ！！人が折角気持ちよく寝てるモノを！！
今何時だと思っているんだ！！！」

拓也

「え？7：00だぞ？」

エヴァ

「・・・まじか？」

拓也

「マジだ」

エヴァ

「・・・まあいい今日休む」

拓也

「ガキかア？600さ」

「バキ！！！」

拓也

「何しやがるンだよオ！！！」

エヴァ

「女にはな．．．女には年の話をしちや駄目と親に教えられなかったのか!？」

拓也

「．．．スマン親いねエ」

エヴァ

「．．．」

拓也

「．．．まア気にすんなや．．．早く行くぞオ飯の時間だぜエ」

エヴァ

「ああ．．．」

エヴァ視点

悪いことをしてしまったな．．．
アイツは気にするなと言っていたが．．．
アイツもまだ16なんだな．．．

それに親がいらないとなるとな・・・私でさえ親は吸血鬼化するまではいたからな
はあ・・・

拓也視点

拓也

「ン？ナニ黙ってンですかア？
気にすんなつただるオがア・・・
これ以上気にしたらシカトすつかンなア」

エヴァ

「お前はガキか・・・ククッそうだな・・・
私らしくも無かった・・・さて、今日は皆で遊ばないか？
学校さぼってな」

拓也

「俺は良いけど、ユウナはどうすんだろオな」

ユウナ

「休むぞ・・・最近疲れてるし」

・・・この家にはさぼり魔しいねエ
はア・・・疲れるぜエ・・・ちよつち楽しいがなア
さて・・・と

拓也

「なら俺から電話かけよオカア？
自分からかけたら仮病過ぎる」

ユウナ

「・・・でも、家の担任さ・・・」

エヴァ

「タカミチだぞ？」

拓也

「いやア・・・俺さアこの前・・・
つつても・・・うざい予感」 - 位だけどなア
新田さんに電話番号教えてもらったぜエ」

ユウナ

「え・・・」

エヴァ

「・・・ナニをしたんだ？」

拓也

「唯、ナンパされてたのを助けた所を見られたただけだなア」

ユウナ

「このフラグメーカーめ……またどうせフラグ建てたんだろうよ……」

エヴァ

「……哀川属性とでもよぼうか……」

拓也

「おいおい変なコトいわねエでくれ・・・
俺は当麻じゃねエし、一方幼女でもねエ!!」

ユウナ・エヴァ

⌈
•
•
•
⌋

おい……まじでなんだよ……

俺なんかワリイコトしたかア？

まア……先に電話かけるとすつかア

עֲזָרָה עֲזָרָה עֲזָרָה

新田

「お、拓也君だったか」

拓也

「はい・・・今日、ユウナと友達のエヴァちゃんが体調悪いらしいので休ませていただいてよろしいでしょうか？」

新田

「分かった……お大事にとだけ伝えておいてくれ」

拓也

「スミマセン」

ーガチャ プープープー

拓也

「電話かけといたぞオ」

ユウナ

「・・・センクー」

エヴァ

「すまん・・・」

何故か分からねエが・・・この無言はキツいぜエ

とうー びー こんてにゅー

アクセロリータじゃねエエ！！（後書き）

今回は次話への繋ぎなのでかなり短いですw

次回の更新を頑張りたいです！！

でわ、次回「モンハンはやっぱり一人じゃ寂しいよね」
よろしく願います！！

モンハンはやっぱり一人じゃ寂しいよね（前書き）

おっしょーやっと完成だーw

モンハンはやっぱ一人じゃ寂しいよね

拓也視点

拓也

「ンじゃ、ナニすンだア？」

エヴァ

「・・・ククツ・・・その前に家の近くの大掃除をしようか」

ユウナ

「・・・懲りずにまあ・・・」

ミサカ

「呆れを通り越して関心しますね。とミサカは心底バカにします」

・・・別に気付かなかった訳じゃねエンだからな！
さて、いらねエツンデレは止めて・・・

拓也

「・・・折角休みとつたのによオ・・・」

まア、リアルジャギイ狩りでもすつかア・・・」

エヴァ

「・・・お前・・・遠回しに雑魚って言っていないか・・・」

ユウナ

「でもさ・・・私たちの戦力みてみ？」

最強の魔法使い、最強の能力者、最強レベルの電撃使い、異能力

無効化者

しかも、相手が魔法使いだからな・・・
イビル4頭相手にレザー一式みたいなレベルだぞ？」

ミサカ

「最強レベルではなく最強です。とミサカは胸を張ります」

エヴァ

「オーバーキルどころじゃないな・・・」

今思えばそうなんだよなア・・・

俺・・・最強を自負してるレベルだろ・・・

エヴァは封印とかれてるからヤヴァイレベルだよな・・・
因みにレベルじゃなくて、レヴェルな？

ンでだ、ミサカ・・・アイツは御坂美琴を超えてやがるからなア・・・

そして、対異能使い最強のユウナ・・・アイツの幻想殺しの前では
何の異能も通じないからなア

しかも、相手がイヤツなら助けちまうしなア・・・
まア、ソコがイトコでもあんだけどなア・・・

拓也

「取り敢えず始めるかア・・・3」

ユウナ・ミサカ

「・・・2」

エヴァ

「・・・1」

拓也

「レッツ！パーティー！！」

「ガチャン」

もうバカでいいかめんどくさいし視点

バカA

「さあ！正義の鉄槌を！！」

バカ共

「鉄槌を！！！」

真名

「嫌だな・・・この仕事・・・」

相手が最強とはまるでトリガーハッピーと一緒に仕事をするみたいだ」

刹那

「例えが分からんのだが・・・」

まあ確かに嫌な感じがするな・・・」

バカA

「ナニを言っているウ？」

バカB

「そつだ私たちに敵は無いのだ！！」

バカC

「そ」

「ブシャアアア」

？

「なんだア？」

バカA

「なに！？」

エヴァ

「魔法使わなくても良くないか？」

ユウナ

「まあ・・・対魔法壁もあつからな」

？

「自分で言うかア・・・」

ミサカ

「私の台詞があ。とミサカは悲しんでみます」

？

「そんなこと自分でいうかア？」

ユウナ

「拓也はそんなことを言いながら殴るの止めないな」

拓也？

「君が泣くまで殴るのをオオ止めないイイイ!!」

エヴァ

「ジョジョネタに走るなバカモノ」

ミサカ

「まずアナタも殴るのを止めましょう。とミサカは電撃を放ちながら言います」

ユウナ

「・・・・はあ」

バカB

「そう言うなら君も殴るのを止める!!」

刹那・真名

「嫌な予感はこのか・・・」

拓也視点

拓也

「抵抗すんなア・・・抵抗しないヤツは助けるぜエ」

真名

「降参するよ・・・」

刹那

「真名ツ・・・私も降参する・・・お嬢様を守れなくなるのは嫌だからな」

バカA

「貴様らツツツツツ!!」

拓也

「ハイお前アウトオ・・・俺に仕掛けンなつたろオ・・・じゃアな・・・」

ユウナ

「はぁい皆さん目つぶろう」

ミサカ

「今回電撃放つただけでした。とミサカはちよつと愚痴つて見ます」

ユウナ

「あはは・・・私はそげぶしかしてなかったからな・・・」

拓也

「天まで届けエバカAクンよオオオオ！」

バカA

「バ・ケ・・モ・・・ノ・・・」

真名・刹那

「（啞然）」

バカの集い

「・・・・・・・・・・（汗）よかった〜降参していて」

拓也

「前も言ったよオに俺らに関わるンじゃねエ・・・関わったらよオ・
・死のみだぜエ
いいなア？・・・よし帰ってモンハンすつぞオ」

真名

「・・・・ココまで来たら呆れるね・・・」

刹那

「確かにな・・・」

ユウナ

「呆れんだろ？真名に刹那」

真名

「そう言えば君も向こう側だったね」

刹那

「どういうことだ？」

ユウナ

「仲間なんだよ・・・相棒だしな」

とうとう　　びびる　　こんてにゆ

モンハンはやっぱり一人じゃ寂しいよね（後書き）

さて、低クオリティでしたが、次回も頑張ります
軽くスランプですがw

では次回「TVゲームしようぜ!!」

よろしくお願いしますね!!

因みに駄猫は色んなトコ（サイト）にいたりしますw

こんな作品を見てくださいますありがとうございます

by十六夜咲夜(前書

昨日ストックがパアになっちまいました・・・

まあ、昨日するはずだった祝50000PV&9500ユニーク話

何時の間にかこんなになってましてびっくりですw

皆さんこれからもネギま！？戦記よろしく願います

こんな作品を見てくださいますありがとうございます b y十六夜咲夜

ミサカ視点

おはようございます。こんにちは。こんばんわ。

ミサカです。拓也とユウナとエヴァとチャチャゼロがゲームをしていて

・・・ぼ、ぼっちなんかじゃないんだからね!!

ンン！今は無かったことにしてください。

さすがに心の中でまでミサカは（ryは言いませんよ？

さて、ずっと前に人物紹介云々をずっと言っていたのですが、中々するタイミングが無かったのでココですることにしたと思います。

まず主人公の拓也

フルネームは「哀川 拓也」

容姿は一方通行（アニメ二期）能力は「一方通行改（レベル6 o v e r）」

私たちのパーティでは最強ですね。

物理攻撃、魔法攻撃、超能力すべて反射できますしね。

次にユウナ

フルネームは「ユウナ・スプリングフィールド」

容姿はけ ぷファアのナツルを黒髪にして、幼くした感じですね。

能力は「幻想殺し改（回復魔法などだけを殺さないようにした都合主義）」と

「前兆の感知」という能力から派生する余波を察知・判断して防御や回避を合わ

せたり相手の隙を見い出すという軽くチートな能力です。

最後に私ミサカです。

正式名称は「神の加護を受けし」モノ」という厨二な名前なのでミサカで良いです。

容姿はミサカの眼が紅版ですね。能力は「超電磁砲改（レベル50 ver）」と

ネタバレになりますが紅の雷翼という翼を出します。

後、今の勢力は

味方

エヴァパーティ、拓也パーティ

敵

正義バカ共

中立

生徒達

戦力で言うと、敵を1とすると味方は530000ですね。

さて皆はまだモンハンしていますしどうしましょうか・・・

駄猫視点

咲夜

「ご機嫌よう

これは本編であり本編でないモノガタリなので私が出ています
さて、この小説は50000PV9500ユニークに到達いたしました

と言うことで今までたまっていたお礼を言おうという粋です」

駄猫

「と言うわけで”お礼を言う粋” 始まります

え？ミサカさんはって？あの娘は前半戦の司会です

まず、Accelerator様感想ありがとうございます！

次に、リョウタ様ありがとうございます！

その次、ネク様ありがとうございます！

ラストオオ！ロア様ありがとうございます！！

それから、このモノガタリを読んでいただいてる皆さん本当にありがとうございます

これからよろしく願います！！」

咲夜

「アンケートは一年の魔帆良祭までです

どんなアンケートかと言うのは、原作主人公「ネギ・スプリングフィールド」を

1．原作通り出す・・・（完全アンチ）

2．出番をなくす・・・（死んだかどうかは・・・）

3．ひょーいさせる・・・（所謂・・・転生憑依）

因みに駄猫は転生憑依というのは死んだ三次元の人間が欲望にまみれて

主人公になりたいと言って憑依して生き返ることと思っていますわ」

駄猫

「ついでに今僕は野菜にセイバーを召喚させて・・・

ルール・・・ゲフン！まあ仲間にするというルートを考えております

この場合は野菜はワカメと同じようなキャラになります・・・

UBWルートの慢心王を持った状態みたいになっw」

咲夜

「あと、ゲス勘違い転生者も出そうか検討中らしいですわ

ワカメ野菜orゲス勘違い転生者のどちらかですね」

駄猫

「ワカメを知らない人のために

Fateの間桐シンジで調べて見てください

まあ予定はどちらかは出すコトになっており・・・

拓也がユウナを（ネタバレ）されて切れた拓也が（ネタバレ）を

（ネタバレ）する

という感じです

因みに拓也君成長しました能力的に

筋力：B
耐久：B敏捷：A
魔力：×

幸運 : A
宝具 : EX
です

元的能力値は「切れないですよ……哀川くん」で出ています」

咲夜

「これで中編を終わります」

馱女神視点

駭女神

「私かい！！！！あと駄女神じゃないです！！」

しるし

ええええええええええ！？

理不尽です！

私は女神こと「セラフィム」です……

畜生！天界中パフエで埋め尽くしてやる！！！！

すいません関係ありませんでしたね
え？休み時間だから私にパス？
ふざけるなああっああああ！！

ミサカ視点

あ、私に戻ってきましたね。
因みに茶々丸が帰ってきました。
一緒にお茶を飲みながら観戦しています・・・「パワプロ」を

拓也

「いつけエ！クロキツバサ！！」

エヴァ

「打ち返して……なん……だと……」

拓也

「俺のオリ変世界ーイ!!」

ユウナ

「まさかのストレート並みのナックルとは思わなかったぞ……
しかも変化が大きい」

チャチャゼロ

「ケケケ、スゲエナオイ」

貴方たちは餓鬼ですか……

まあ楽しんでるなら良いのでしょう……良いんですね？

こんな作品を見てくださいますありがとうございます

b y 十六夜咲夜（後書

今、書いていた桜才戦記修復なうです・・・

さて・・・次回は「哀川くんの学校戦記」

魔帆良祭まで結構カットしますよ

では次回もよろしくおねがいします！B i s b a l d！

期末赤点取っちゃったけど成績ではセーフでしたw

ふうセフセフw

まっただ見てね

（ ・ A ・ ）ノシ

哀川くんの学校戦記 前編

拓也視点

はいどオモオ哀川でエす

今学校に来てるなう

え？何で学校に来てるかってエ？

ユウナとミサカが弁当置きやがって行つてなア・・・

メンドクセエ・・・

まずクラス知らねエしよオ・・・メンドクセエ・・・

1-Aとは言つてやがったんだが・・・まず女子中入るのがしんどいぜエ・・・

特に顔が悪人面だかなア・・・チンピラと勘違いされそうだなア・・・

よくあることだがなア・・・微妙に傷つくからなア・・・
はア・・・さて、いくかア・・・

ユウナ視点

ユウナ

「あ．．．飯忘れた．．．」

ミサカ

「忘れてしまいました．．．。とミサカは自分のミスを告白します」

千雨

「おいおい．．．私の食べるか？」

ユウナ

「いいよ．．．多分拓也が持ってきてくれるから」

千雨

「拓也？．．．．．お前！アイツの知り合いか！？」

ユウナ

「あ、ああ．．．それがどうかしたか？」

千雨

「アイツ、あの後一回も来なかったんだよ！！」

ミサカ

「何処にですか？とミサカは訪ねます」

千雨

「私の部屋」

へえ・・・アイツまたやりやがったのか

お仕置きかな？

ウフフフフフフフ

千雨

「何で黒いオーラ出してるのか知らないが、答えを聞いてもらっただけだぞ？」

ユウナ

「答え・・・へえ・・・やはり・・・」

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！」

千雨

「（ガタガタガタ）おい・・・黒いぞ・・・」

・ガラガラ・

拓也

「失礼すんぜエ・・・上条ン！ユウナ・スプリングフィールドはいるかア？」

拓也視点

ユウナ

「・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！」

？むぎのンかア？

むぎのんとは

この世界で知り合ったアンチ正義の魔法使い仲間です。

とは言っても転生者ではありませんよ？超ありえません

因みに本名は「麦野沈利」

仲間がいて、それぞれの名前が

「絹旗最愛」

超超言う子です。魔帆良中学（正式名称は麻帆良学園本校女子中等学校）の二年生です。

「フレンダ＝セイヴェルン」

普通に外国の子です。魔帆良中学の二年生です。

「滝壺理后」

・・・駄猫好みです。魔帆良中学の三年生です。

そのむぎのんの口癖が「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」
なんだが・・・

何故知ってるんだア？

拓也

「失礼すンゼエ・・・上条ン！ユウナ・スプリングフィールドは
いるかア？」

ミサカ

「お弁当ありがとうございます。とミサカは自分の名前でないのを少しすねながらお礼を言います」

？

「ラブ臭がッ！」

？

「うざいです」

拓也

「ナニ？このカオス・・・」

ユウナ

「ククク・・・たアくやクウウウウン！またデメエフラグ建てやがったな！？」

拓也

「俺にはナニが何だかわからねエンだがア！？」

千雨

「あん時の答えでコイツがなんか先走ったんだよ」

拓也

「ヘエ・・・あん時の答えでたんだア・・・
ンじゃあ・・・後でいくわア・・・」

さアてさて・・・

どんな答えが出たんだろオカア・・・

ユウナ

「どうということだ？」

拓也

「ヒントはこれだ

1・俺たちの世界

2・ガングロ

3・約束

これで分かるだろオ？」

ユウナ

「…………へえ…………」

ミサカ

「モキユモキユ」

拓也

「ヤベエ…………カアイイ!!!!!!」

ユウナ

「おい！？拓也キャラ崩れてんぞ!？」

……………び……………

哀川くんの学校戦記 前編（後書き）

最近・・・皆にSって言われる・・・

拓也

「お前の通常モード・・・ドSじゃねエか・・・」

チゲエ！！

僕はまあ唯ちよつと少しだけ虐めるのが好きなだけだよ！
かわいが

拓也

「おいおい・・・」

哀川くんの学校戦記 中編

拓也視点

どうもオ・・・前回モキュモキュでキャラ崩れしまくった拓也だア
ンン！では改めおはこんばんちわア

この挨拶はいつでも対応出来るって言うスゲエモンなンだぜエ

さて・・・と

暇な昼間を飛ばし！放課後っていう結果だけを残す！！

拓也

「おい・・・千雨は未だかア？」

ユウナ

「ついさっき終わったばっかだしなあ」

ミサカ

「拓也はガキなのですか？とミサカは純粹に訪ねます」

拓也

「どちらかというとき黒いな・・・」

・コンコン・

千雨

「おじゃまします」

拓也

「お！待ってたぜエ！！」

ユウナ

「ガキみたいにワクワクしてたぞ」

拓也

「いらねエコト言っくんじゃねエ」

千雨

「まず答えからだ・・・」

- 回想 -

あの後電話をしていたんだ

拓也

「仲間になるなら超能力が魔法のどちらかを手に入れてもらっ」

千雨

「超能力？」

拓也

「あア・・・」

学園都市において研究されている、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力だ

バーチャルリアリティ

自分だけの現実と呼ばれるミクロな世界を操る能力を土台としており、

「起こりえない」ことを「起こる」と思い込むことで超常現象の現に結びつけるんだ

学園都市の『開発術』が確立されたことで人為的に習得することが可能になったんだが、

それ以前から「天然で能力を発現させた者」である『原石』が存在する

また、『原石』という「才能ある人間と対等になる為の技術」として『魔術』が生み出されている

これを行使用する者は超能力者と呼ばれそうだが総称は『能力者』
つつうんだ」

千雨

「……なるほどな」

拓也

「魔法つつうのは

灯りを点ける、手を触れずに物を動かすといった魔法から、戦いのための魔法まで多種の魔法や

魔法の品物が登場する。古今東西の実存する魔術体系を背景として利用しているんだ、大きな区分と

しては、西洋魔術、東洋呪術などがあるんだ」

千雨

「ふむ」

拓也

「ンでだア

西洋魔術ではラテン語または古典ギリシャ語の呪文が唱えられるんだが

ラテン語と古典ギリシャ語では、後者の方が上位の魔法であるとされるんだ

呪文を唱える前に「始動キー」という、

言葉としては意味を持たないパスワードのようなものを唱えるが、簡単な魔法では修練次第で省略できる。術者により始動キーは異なるんだ」

千雨

「詳しいな・・・」

拓也

「情報は武器だからなア」

千雨

「言い得て妙だな・・・」

拓也

「つつウ訳だ答えは今度な」

- 回想終了 -

千雨

「超能力だ」

拓也

「いいのかア？」

千雨

「べ、別にお前と一緒にが良いなんて思って無いんだからな！」

ユウナ

「あっいかわクウウン！ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！」

ミサカ

「やめといたほうが……。とミサカは答えます」

拓也

「はア・・・取り敢えず
脳開発すンぞオ」

千雨

「・・・どついうコトだ？」

拓也

「簡単に言ったら演算能力を上げるつつウことだア」

千雨

「なるほど」

拓也

「ンじゃあ・・・」

「ポン」

千雨

「・・・なんだこれ・・・数式が・・・」

拓也

「ちっと黙っててくんねエか？結構複雑なンでなア」

千雨

「・・・」

・・・うっ
びっ
にんてにゅっ

哀川くんの学校戦記 中編（後書き）

・・・夏休みイイイ！！！！！！

・・・はぁ・・・

まだまだ来ないので・・・夏休み・・・

哀川くんの学校戦記 後編

拓也視点

さア・・・拓也だぜエ

ココで一つ面白い話をしてやるぜエ・・・

千雨の能力・・・何だと思う？

まア・・・選択させてやる

1・大嘘憑き

まアコレは某めだか箱の括弧付きで話す男の能力だなア

2・境界を操る程度の能力

コレは某幻想の世界の賢者の能力だなア

3・未元物質

ていとくんの能力だぜエ

さアどれだア？

正解は・・・

2の境界を操る能力だ・・・

どと思う？やばくねエかア？俺でさえ簡単にまけちまうぜエ・・・
いっちゃん天敵な能力だしなア・・・

能力者からしたらよオ・・・だって境界弄って能力使えなくさせられたらよオ・・・

千雨

「・・・なんで・・・隙間BBAの能力なんだよッ!!」

拓也

「俺に聞くンじゃねエ!!!!!!」

ユウナ

「うわ・・・引く程強い能力だ・・・」

ミサカ

「・・・能力者からしたら泣きそうな能力ですね。とミサカはちょっと弱気になってみます」

ユウナからしたらそんなでもねエよなア・・・
どちらかというと殺しそうだな・・・
幻想的な意味で

あア・・・一つお知らせがあるンだぜエ

前々回で紹介した・・・むぎのんはもオでねエぜ

拓也

「ならさア・・・ちよつと弄くってみるよ・・・境界」

千雨

「分かった・・・やってみる・・・」

拓也

「ン？・・・隙間ではねエなア・・・

コレは・・・」

・ギイイイイイイン・

拓也

「ガハッ・・・」

コウナ

「っちょ！どうした!？」

拓也

「コレは人間が持つてて良い能力じゃねエ・・・

一瞬で暴走しそうになって・・・ンで抗ったら頭痛がなア・・・」

千雨

「もう・・・何もこ」

ミサカ

「それ以上はマミってしまうので。とミサカは死亡フラグを回避させます」

千雨

「つく・・・私としたことが・・・テンションがあがりすぎたか・・・」

拓也

「・・・お前・・・キャラ崩れまくってンぞオ？」

ユウナ

「まあそこら辺は駄猫の所為だし」

- パス -

拓也

「どっから矢が飛ンできたンよ!？」

ミサカ

「なになに・・・メタ禁・・・これだけですか?とミサカは破り捨て」

- パス -

千雨

「・・・あたしがとんのか?この矢・・・次当たるフラグ建つぞ?」

拓也

「残されてオチを作らされるか、今逝くかどっちが良い?」

千雨

「・・・よし!いくぜえ!!」

なになに・・・破るな・・・
千雨・・・逝つきまーす！」

－パス－

拓也

「・・・落とすのメンドイなア・・・
いつそのこと適当に挨拶して終わりででもいいしなア・・・
でも今回で学校編終了だしなア・・・
ここは・・・

漢は度胸！！！！

えエと・・・後ろを振り向いてみ？・・・

なんだア？コレ・・・」

－フイ－

紫

「誰がババアですって？」

拓也

「・・・ギャアアアア！？」

哀川くんの学校戦記 後編（後書き）

やっと次回から話しが進みますw

どうでしたでせうか？

因みに、あの三つで能力どれにするか迷っていましたが、

結果が効かないと言う点とかで、B B Aの能力を

紫

「だあれがババアですって？」

・・・アナタです！

紫

「（ブチッ）え？聞こえなかったですわ・・・
なんと言いましたの？」

え？アンタがババアって

紫

「スキマツアーへごあんない！」

ンギヤアアア！？

しかし・・・我が生涯に一片の悔い・・・あり！

拓也

「あるンじゃねエか・・・」

まア、いいやア・・・

次回魔帆良際準備編！

もうこっちの世界では9月に近いぞオ」

紫

「拓也くんもう帰ってきましたの・・・

ならもう一度・・・レッツスキマツアー！」

拓也

「ヘエ???ってンギヤアアアア!?!」

お片付けお片付けエ！！

拓也視点

さアて・・・最近色んな世界・・・コレはメタかア

俺は・・・普通の人間には興味がねエ・・・この中に

宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居るなら俺ントコに気やが
れエ！

・・・って言つてもよオ・・・

宇宙人、未来人〓超

異世界人〓俺たち

超能力者〓俺たちっていう涼宮さんもビックリのパーティだなア・・・

・
てなわけで、どうもオ哀川拓也だア

へろろオン

最近の俺の流行はひぐらしだぜエ・・・

特に圭一がカッケエと思うんだがよオ

みんなはどオだア？最初の時は微妙だけどなア・・・

拓也

「と言うわけで俺は魔帆良中学校に連れてこられたとさ」

千雨

「どうしたんだ？一体・・・」

コウナ

「ああ、コイツ時々こついつのあるから」

ミサカ

「電波ですね、分かります。とミサカは頭を心配します」

拓也

「分かるンならよオ・・・頭を心配すンじゃねエよ・・・
しかも疲れた・・・俺運動できねエしよオ・・・」

ユウナ

「どの口が言うんだよ・・・」

この何しても出来る天才馬鹿め・・・」

ミサカ

「基本拓也は何でも出来ますよね。とミサカは普段はマダヲなことをかくしん」

拓也

「俺ア長谷川さんじゃねエ!!」

もオそろそろ切れるぞオ?メンドクセエのに来てやったンだから
よオ・・・」

ただいま部屋の飾り付けを作るのを手伝いながら、駄弁ってます
まア・・・しんどいねエ・・・

早く寝たいンだ・・・昨日きちんと寝れなかったしよオ・・・
ンでさア・・・前回より1週間進ンでるぜエ・・・

千雨

「長谷川って私しか居ないじゃねえか!」

拓也

「オマエはマジで駄目な男じゃアねエだろオがよオ・・・」

千雨

「まあ、私は女だしな・・・」

ユウナ

「マダヲは銀　の長谷川さんだよ」

ミサカ

「そう言えば、拓也のしゃべり方どうにかならないんですか？
とミサカは意味のないことを聞きます」

拓也

「設定上ムリだなア・・・」

ユウナ・千雨

「設定言っな！」

拓也

「それにしても・・・終わらねエ・・・」

ユウナ

「皆なにしてんのかな？」

拓也

「ちと見てくるぜエ」

結果・・・拓也がキレました。

さて、一部始終をどうぞ

和美

「きたあの白いヒト彼氏なのかな？」

ハルナ

「むふふラブ臭が・・・」

・ガラガラ・

拓也

「・・・おい・・・コッチはさア

せつかくの休みをテメエらの手伝いに来たんだよ・・・

なのによオ・・・テメエら・・・

ならよオ・・・テメエらの俺たちに任せろっていう・・・

まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ！」

超鈴音

「・・・君の瞳に困憊ネ」

拓也

「ざけんなやア!!」

トウッ ビッ コンテニユッ

お片付けお片付けエ!! (後書き)

もつすぐ魔帆良際(1年目)・・・

夏休み中にやってやります!!

合宿合宿ウ・・・あ、違った圧縮圧縮ウ！

拓也視点

はろオ！最近胃薬と友達な俺！拓也だぜエ

さて、前話から二日経ったぜエ・・・今日はなにもねエ唯の休日だから

恋姫をやるうと思っっているんだが・・・
下の部屋に

エヴァ、茶々丸、ユウナ、千雨、ミサカ・・・

ムリだア・・・

と言うわけで・・・

俺は危険を顧みず・・・

ヘッドホンをつけるぜエ！！！！

騒がさなければ行けるはずだア

いや、ムリかア・・・

さて、どうしたもんかねエ・・・

別にナニをするって訳でもねエンだがよオ・・・

アレなシーン見られるのだけは勘弁だからなア・・・

ここは・・・アキバに行くかア・・・

と言っわけでやってきましたAKB

まア、今の言葉に理由はねエンで適当に流してくれやア・・・

さて・・・きたはいいンだがよオ・・・パソコン喫茶行くのがメンドくなっちまったンで

回ることにするわア・・・

最初はと のあな・・・取り敢えずゲームを揃えたいと思う

紫少女T

「こなちゃん・・・はいよ」

こなちゃん？

「ゴメンゴメン！取り敢えずアニイト行こうよ」

・
ド
ン
・

こなちゃん？

「あ、すいません」

チンピラA

「ああ！？何処みてやがんだ？」

紫少女T

「あうあう・・・」

と、思ってたけどよオ・・・

さて、チンピラぶっ飛ばすかア・・・

拓也

「あらよつとオ・・・すみませんねエ・・・
俺の連れがよオ・・・はやく来やがれ」

こなちゃん？

「来てくれたんだ！」

拓也

（さて、どうすつかア・・・潰す？よし！相手が何かしてきたらそうしよう）

チンピラA

「腕おれちまつたんでなあ・・・慰謝料よこしやがれ・・・」

殴られたくなかつたらな！」

拓也

「殴ればア？テメエの力なンぞよオ痒くもねエぜ？」

こなちゃん？

「え？君なにいつてるの？」

拓也

「黙ってる・・・（ボソ）

早くしやがれエ・・・メンドクセエからよオ・・・」

チンピラA

「なめてんじゃねえぞ！！」

- バキ -

拓也

「氣イスンだかア？」

チンピラA

「まだだぜ！！」

こなちゃん？

「えっ？ちよっ！？」

- スッ -

拓也

「正当防衛だよなア？」

- バキッ・・・ズザッ -

チンピラA

「ぐはっ・・・」

拓也

「あり？やりすぎたかア？」

・・・まアいいか・・・ンでそっちの青いの大丈夫かア？」

こなた

「私は泉こなたって言うんだけど・・・何で殴られたの？」

拓也

「ン・・・其処で引いたらOKだったし、引かなかつたら正当防衛で合法で殴れるからなア」

紫少女K

「こなたから離れるお!!」

- ガス -

拓也

「ンごばアツ!？」

紫少女K

「大丈夫こなた!？」

こなた

「・・・その人私の恩人だよ・・・？」

拓也

「り、理不尽だア・・・」

かがみ

「どうも!すみませんでした!!」

拓也

「いや・・・唯チンピラより痛かったとだけ言っておくことにする
ぜエ・・・」

ンで、今何時だア？」

つかさ

「え」と・・・午後3時です」

拓也

「ちくせう・・・不幸だア・・・
最初からとらのな行こうとかアニメイ 行こうとか考えない方がよかったな・・・」

こなた

「あゝものは相談なんだけど・・・案内しようか？」

拓也

「マジで！？センキュー！大好きだアコンチクショー！」

かがみ

「てい！」

・バスツ・

拓也

「っは！？俺は何をしていたんだア？」

こなた

「ノリで好きだコンチクショーっていったよ／＼／」

拓也

「不快な思いさせてスマン・・・
ンで、案内よろしく頼むぜエ・・・ここらの地理全然ねエからよ
オ・・・」

こなた

「そうなの？・・・今何処に住んでるの？」

拓也

「魔帆良学園都市だぜエ」

こなた

「・・・ちうたんしつてる?」

拓也

「・・・しつてるつつウか・・・」

かがみ

「つつか?」

拓也

「一緒に住んでるヨ」

こなた・かがみ・つかさ

「「「・・・え?」」」

拓也

「別に同棲とかじゃねエからなア・・・」

家の部屋の一室を貸してるだけだからなア・・・」

さて、AKBを回ったんだが殆ど欲しいモノは無く
その代わり面白いモノを見つけた・・・コレだ

PSP版恋姫・・・全種類だぜ！

帰ってプレーしようとしてたんだが・・・

こなた達に引き留められた・・・メアドと連絡先とネットゲ内の名前
だそうだ・・・

今度連絡しろってことだよなア・・・まあいいかア・・・

これがアイツらに知れたら・・・はア・・・

合宿合宿ウ・・・あ、違った圧縮圧縮ウ！（後書き）

さて・・・いつの間にか総合評価が軽く前作を超えたネギま！？
戦記

スランプに陥りしんどいですが・・・これからも一生懸命頑張りますので

よろしくお願いします！では！

直ぐに呼びましょ万屋さん (前書き)

今回はちょっと短いですが進行に関係あるのかかせていただきます

直ぐに呼びましょ万屋さん

拓也視点

はいどオモオ・・・万屋たくちやんだぜエ・・・

まア、ジャ プ見てたからって訳じゃなく、マジで万屋なんだがなア
さて、金は某銀さんが目を\$にしながら追ってきそうなレベルだなア
さて、・・・魔帆良際なんだがよオ・・・

俺は何故かサイドポニテがよってきてめんどくさいぜエ・・・
しかも後ろには・・・

俺の好みの・・・あア・・・ロリコンになるなア・・・
てかあの体型はロリではねエなア・・・

なら、おkかと聞かれたら多分ギリギリアウトだろオがなア

刹那

「哀川さん・・・すみませんがお嬢様の護衛を頼めませんか？」

・・・え？マジで？喧嘩売ってきたンじゃねエの？

拓也

「万屋への依頼で良いんだよなア？」

刹那

「ええ」

真名

「貴方も金で動くんだな」

拓也

「コレが仕事なモンでねエ・・・
一応この仕事に誇りも持ってるしなア・・・」

真名

「そうかい」

拓也

「そうなんだぜエ」

刹那

「お金は何時？」

拓也

「まア、俺の仕事の働きの良さにあわせて・・・
つつつてもテメエ達学生だしなア・・・
缶コーヒーでいいぜエ・・・破格だろオ？」

刹那・真名

「っへ？」

拓也

「ンじゃテメエ達は~~~~万とか払えンのかア？
ムリっしょ？なら俺の心遣いに甘えときやがれエ」

刹那

「わ、わかりました」

拓也

「ンで、仕事する際に事情を説明してもらいてエンだがよオ・・・
何故俺に依頼したア？」

刹那

「いえ、学園長に日中も徘徊たのm」

拓也

「学園長殺してくるなア」

真名

「・・・お金貰ってるから何も言えないんだよ」

拓也

「いや、あからさまに労働基準法破ってるし・・・
あれこそ生きる害虫じゃねエかよオ」

真名

「あれでもお客さんだしね」

拓也

「傭兵つつウのは辛いねエ」

真名

「貴方も同じようなモノだろうに」

拓也

「俺アどちらかというと護衛っぱいののついでだしなア」

真名

「へえ、貴方も刹那と同じで護衛をしているのか」

拓也

「・・・護衛つてのはどオナシだろオか・・・ま、微妙なところだ
なア

取り敢えずオツケーだ・・・」

直ぐに呼びましょ万屋さん（後書き）

次回護衛対象は大和撫子！？

では次回もよろしく願いしますねw

では

ちつとした外伝 第一話 哀川君は聖杯戦争で勝ち抜けるのか？

・・・シー・・・

記憶が何個もあるなア・・・

魔帆良つつウとここではミサ力って言うのがいたなア・・・

優奈もなんか英雄の娘になってたなア・・・

・・・俺が大神とかつてのもあつたなア・・・

死ンじまった今は全てがなつかしいわア・・・

まア、やりたいことは全部できたしなア・・・やりたいこと・・・

あ！？変な声が聞こえたからこうなつてやがンのかア！！

・・・やっちまったことはしょうがねエ・・・

と、言いたいンだが・・・この引力はなんンですかア！？

拓也

「ンギヤアアアアア！？」

- バキバキバキ -

拓也

「痛エ・・・」

- バン! -

凜

「セイバー・・・じゃないわよね・・・って拓也!？」

拓也

「・・・凜さん何してンですかア？」

凜

「いえ、私は何故かまたこの世界に来てしまったようなの・・・で、此処に来たのも何かの縁だと思ってまた聖杯戦争に参加しようと思ったの」

拓也

「・・・アーチャーが召喚されンじゃねエの？」

凜

「さて、何故かしら・・・？」

まあ、また貴方と暮らせるなら幸せよ・・・フフ・・・私らしくもないわね」

拓也

「・・・色々はずいぞオ・・・//」

凜
「クスクス」

拓也
「ンで、聖杯戦争・・・ヤンのかア？
ステータス的に行けンじゃねエかア？」

凜
「拓也のコトだから英霊？なにそれおいしいの状態でしょっね」

拓也
「ン・・・と、オールSだったかどうか？」

凜
「・・・・・・・・・・・・・・・・アハハ嘘よね？」

拓也
「・・・・・・・・・・・・・・・・マジだぜエ」

凜
「・・・・・・・・まあいいわ・・・」

拓也
「・・・・・・・・ンで、どうする？」

凜
「そっね・・・取り敢えず街を案内するわ」

拓也
「・・・・・・・・そオすつかア・・・」

- 冬木の町並みを見ることの出来るビルの屋上 -

拓也

「おい・・・凜さん・・・俺はアーチャーじゃねエぞオ？」

凜

「あ、そう言えばそうだったわね」

拓也

「まア、見えないこともねエからいいンだが・・・」

凜

「なんだかんだいって見えるのね」

拓也

「ン・・・まアなア・・・」

凜

「さて・・・ランサーからだろうから・・・

って、そう言えばアナタのほづが最速といたらふさわしいわよね・・・」

拓也

「・・・俺は最狂を名乗ったりしてるんだが、今クラス名見たら『英雄』」

俺はあれか？あのオ・・・ヒーローなんて名乗ってはいませんが？当麻なら分かるんだが」

凜

「アンタにすぐわれた人も沢山いるからね・・・」

拓也

「・・・まアいいかア・・・」

ンじゃア・・・軽ーく・・・聖杯破壊しますかねエ」

番外編続く

ちつとした外伝 第一話 哀川君は聖杯戦争で勝ち抜けるのか？（後書き）

特に連絡はないですw

あるとしたら・・・スランプまっしぐらですww

では次回もよろしく願います！では！

護衛対象は大和撫子!?

拓也視点

はアい前回に引き続き万屋たくちゃんだぜエ・・・
さて、自分不器用なンで護衛対象にいきなり接触すンぜエ!
・・・はア・・・
えゝと・・・? 近衛木乃香だっけかア?
・・・黒髪で、おっとりしていて、美人だったけかア・・・

・・・この場合どうしたらいいんだろうな・・・
え? どうしたんだって? 見つかったんだよ・・・
めっちゃ早くになア・・・
もオ、モチベーション駄々下がりだわア・・・
折角張り切って探しに行こうって言うときに見つかったってよオ・・・
・
バッドタイミングだなア・・・
取り敢えず、俺の顔は知ってるだろオし声かけるかア・・・

拓也

「あゝ、テメエが近衛木乃香かア?」

木乃香

「うん、そうやえ」

明日菜

「木乃香に何の用よッ！」

拓也

「其処のオレンジうるせエ・・・
ちよつと最近物騒らしくて俺がボディガードを務めるコトになっ
たから挨拶に来たんだよ」

明日菜

「はぁ？アンタ、ボディガードにしたら体細すぎるでしょう」

拓也

「オレンジよ・・・
体格で簡単に実力計ってる内は三下だぞオ？
コレでも結構強いしなア・・・主に万屋の仕事で色々してから
なア」

「ちゃんと超能力のコトは隠して言ったが・・・
鬱だア・・・このオレンジも一緒に行くとはよオ・・・」

明日菜

「信用出来ないわね・・・」

拓也

「信用して貰わなくても結構
テメエ達がクライアントじゃねエしなア・・・」

明日菜

「くらいあんと？」

木乃香

「明日菜、其れは顧客って意味やよ」

拓也

「・・・はア

・・・取り敢えず学園祭の間は一緒に回ることになるからな
あと、俺ンコトは哀川さんもしくは拓也さんでオツケーだから」

木乃香

「うん、わかったで」

そういえば拓也さんて学園祭の出し物の準備手伝ってなかった？
」

明日菜

「そう言えば・・・」

拓也

「ン？覚えてたのかア

居たぜエ・・・少しキレイしたりしたかなア・・・

覚えてンなら早エだろ・・・

ユウナ・スプリングフィールド及びミサカの保護者役の哀川拓也
だア・・・

万屋をしてっから困ったことが有ったら言いなア・・・
缶コーヒで手を打ってやるぜエ」

明日菜

「・・・格安ね」

木乃香

「わかったえ」

取り敢えず色々話し合ってどいう風に動くのか決めた・・・
あ、言っただかア既に一日目なんだぜエ

明日菜

「まずは、普通に回るのよね？」

拓也

「普通ねエ・・・」

テンプレ気味だが、まずお化け屋敷でも行くかア？」

木乃香

「OKやで」

- お化け屋敷 -

依頼・・・近衛木乃香の護衛

- 条件 -

1 ・危険な目に遭わせるな

2 ・はぐれるな

3 ・危険な目に遭った場合、近衛木乃香をまず逃がす

4 ・最悪の場合記憶を消しても良い

こうやってもう一回見ると物騒だよなア・・・

本当にまいっちまうぜエ？流石の俺でもよオ・・・

- のっぺらぼうの場合 -

拓也

「・・・？」

何故俺の腕を二人とも抱きしめてやがんだア？」

明日菜

「い、良いじゃない！別に！」

木乃香

「ノリやで」

「うらめしや」

明日菜

「きゃあああ！」

拓也

「うお！？」

ン？今何に驚いたかってエ？

・・・明日菜の抱きつきの威力にびびった・・・
腕の骨が逝かれるかと思ったぜエ・・・

木乃香

「大丈夫かえ？明日菜」

拓也

「俺の腕が大丈夫じゃない・・・」

明日菜

「・・・べ、別に怖くなかったわよ!」

拓也

「なら、腕を放してくれ・・・折れる・・・」

・こんなにやぐの場合・

拓也

「ようやく出口が見えたなア・・・」

俺の腕が何回逝かれかけたか・・・
痛かったぜエ・・・全くよオ・・・

明日菜

「そうね・・・」

木乃香

「おもしろかったわ」

拓也

「ンじゃ、行くぜエ」

明日菜

「あたしコレが終わったらゆっくり寝るんだ・・・」

拓也

「っちょ、まさかの此処で死亡フラグかよオ」

-ピトツ-

明日菜

「キヤアアアアア・・・」

拓也

「・・・」

-ペチペチ-

木乃香

「気絶してもうたな」

拓也

「・・・此処のクオリティ半端無かったししゃねエよ」

ただいま木乃香と明日菜の部屋だぜエ

男子禁制なんだがなア・・・

おっと一日目が終わるがまだ目覚めてないコイツの為に一応一緒に
いとくかア

お、目を開けやがったア

拓也

「よオ」

明日菜

「何で私寝てたの？」

拓也

「気絶してたんだよ……」

木乃香

「明日菜おきたんか」

拓也

「まア、明日の為に早く寝るのが得策だぜエ」

明日菜

「そうね……おやすみ」

拓也

「……何で俺の膝の上で寝んだよ……」

護衛対象は大和撫子！？（後書き）

次回二日目・・・

一体どうなるんでしょうか？w

そう言えば自分、遊園地にいったんですが

ぐるぐる回るゝこの感じがたまらないゝって感じで回していると

コーヒークップで気分が悪くなった駄猫ですw

ぐるぐる回しすぎて死にそうになりましたww

次回もよろしく願いしますね・・・では！

最近の学校スゲエ・・・前編

拓也視点

はアい前回、前々回に引き続き万屋たくちゃんだぜエ・・・
最近のロボットはスゲエなア・・・

空とぶんだぜエ？魔帆良って
ぬらりひょん居るし、空にはロボットが居るし、科学力が何よりス
ゲエ

明日菜

「え」と昨日はごめんなさい！」

拓也

「いや、別に足痺れたぐれエだから大丈夫だ問題ないぜエ」

木乃香

「男なら足痺れたとかゆわんほうがいいで」

拓也

「中学生に言われるとかオレ＼（＾o＾）／」

明日菜

「なんで両腕あげてるの？」

拓也

「・・・ほつといてくれ」

木乃香

「さわらんぼうがええ」トもあるねんで、明日菜」

拓也

「電波は怖いぞオ・・・」

- 喫茶店 -

拓也

「さて・・・何喰う？」

明日菜

「え？いいの？」

木乃香

「ありがとう」

拓也

「オレはコーヒーで」

明日菜

「な、なら紅茶で」

木乃香

「うちは緑茶で」

拓也

「・・・あんのかア？」

マスター

「・・・あるよ」

三人

「「「え・・・」」」

・ティータイム・

拓也

「さて、何処を回る？」

明日菜

「うちのクラスの知り合いがバスケの試合するって言ってた覚えが」

木乃香

「そう言えばゆーながゆってたな」

拓也

「なら其処に行くかア・・・マスター幾らだア？」

マスター

「500円だ」

三人

「」「安ッ！？」」

おいおい安すぎンだろオ・・・

一体大丈夫なのかア？あの店はよオ・・・

お気に入りにしてようと思ってるから潰れて貰っちゃこまるしなア・・・

・

因みに今・・・体育館だぜ

拓也

「ココで・・・おおやってるなア・・・」

明日菜

「3 o n 3 ね・・・」

木乃香

「・・・あれ？ゆーなの方の一人たおれたえ！？」

拓也

「・・・ちよつと行ってくるわア・・・オレ・・・球技特意だしなア！」

明日菜

「アイツ・・・なんか子供みたいな屈託の無い笑顔だったわね」

木乃香

「可愛かったえ」

- バスケットボール 試合 -

拓也

「え〜と其処のおぜうさん・・・オレを君のチームにいらてくれね

エかア？」

裕奈

「え？え？」

拓也

「一人ケガしたんだろ？いけるだろオ？」

裕奈

「う、うん・・・」

拓也

「よっしゃー！久々にあそべるぜエ！」

裕奈

「・・・喜んで貰ってありがたいんだけどにや・・・」

- 試合終了 -

明日奈

「・・・25:07て・・・」

木乃香

「すごいな、殆ど拓也さんやったやん・・・」

裕奈

「知り合いなんだにや・・・三人って」

拓也

「ン・・・優奈とミサカと千雨とエヴァと茶々丸とも知り合いだぜエ」

明日奈

「確か親代わりに一緒にすんでのよね？」

拓也

「ン・・・そオだぜエ」

裕奈

「中々すごい友好関係だね」

拓也

「自負してるぜエ・・・」

後編に続く

最近の学校スゲー・・・前編（後書き）

はい、久々にコッチですw

とりあえず、一体どうなるんでしょうか？w

高校ツライぜ・・・全くよオ・・・

では次回もよろしく願いしますね・・・では！

最近の学校スゲエ・・・中編

拓也視点

はアい前回、前々回、前々前回に引き続き万屋たくちゃんだぜエ・・・
やっとかツチ書きやがったかア・・・
はア・・・遅すぎんだろ・・・メンドクセエ・・・
さて・・・前はガラにもなく球技を本気でやっていたんだが・・・
何か武道大会やるらしい・・・かめはめ 撃つ孫くんはいねエの
かなア・・・
一片やってみたいぜエ・・・べ、別にバトルジャンキーなんかじゃ
無いんだからね！
・・・やっぱ何回やってもキモイモンはキメエな・・・
駄目だなア・・・でも入り方がツンデレ型じゃねエとなんかしつ
りこねエ・・・

拓也

「はア・・・」

明日菜

「どうしたのよ？ため息なんかついて」

拓也

「いや・・・自分のあり方に疑問を抱いてなア・・・」

木乃香

「占いでもしかろか？」

拓也

「遠慮させて貰うぜエ・・・」

さて・・・俺は大会？天下一武道会？まア、それに出ようと思っ
てなア」

明日菜

「・・・ああ・・・」

木乃香

「大丈夫なん？」

拓也

「あア・・・大丈夫なンだぜエ・・・」

明日菜

「なんか気抜けてるようだから・・・気つけなさいよ？」

拓也

「あア・・・」

- 会場 -

拓也

「雑魚ばつかで疲れたア・・・」

・・・あれ？描写されてねエよオナ・・・
またアレか？駄猫の手抜きかア？・・・メンドクセエことしたのに
手抜きとか・・・

拓也

「・・・天下一武道会じゃねエけど・・・強いのは居なかったしな
ア・・・」

・・・睨まれてるなア・・・自分で言っちゃったとはいえ・・・
俺みたいなモヤシを睨むとは・・・暇人かア？あれ？言ってる意味
が分からねエ
取り敢えず・・・決勝だなア

司会者

「さて・・・第一回戦！哀川拓也対モブ太郎A！」

・・・名前エ・・・取り敢えずスルーでいくかア・・・

モブ太郎A

「君に勝って名前を貰うんだ！」

拓也

「・・・名前ぐらいつけてやれよ・・・」

モブ太郎A

「取り敢えず逝くぞ！」

拓也

「字が違エ！！」

「バキ」

司会者

「哀川選手の勝利です！」

拓也

「・・・何とも言えねエむなしさが広がるぜエ・・・」

司会者

「第二回戦！哀川拓也対津田タカトシ！」

・・・なんてやねん！

マジなンでだよ！ビックリだぞオ！

タカトシ

「よお！」

拓也

「なんでいんだよ！」

タカトシ

「宣伝してこいつで会長が・・・」

拓也

「よくココまで残れたな・・・」

タカトシ

「駄猫さんのお陰だよ」

拓也

「なるほどご都合主義か・・・」

タカトシ

「まあ、そうなるね」

拓也

「ンじゃ・・・宣伝しろ

そしたらあわきんドラムって元の居場所に戻してやるから」

タカトシ

「死んじゃうよ!」

拓也

「大丈夫だア・・・そこら辺は補正かけるだろオからな」

タカトシ

「チクシヨー!!!桜才戦記よろしく!」

・バキツ・・・パンパン・

拓也

「フウ・・・」

司会者

「・・・哀川さんの勝利です!」

意外に長くなるから・・・後編へ・・・

最近の学校スゲー・・・中編（後書き）

やっと更新できたが・・・なんという低クオリティ・・・
はあ・・・妹様・・・なんとか俺のPC時間をくれえええ

最近の学校スゲエ・・・後編

拓也視点

はアい前回、前々回、前々前回（ryに引き続き万屋たくちゃんだぜエ・・・

残念なお知らせとしては・・・大会は特に面白いコトがなかったからカットだア

駄猫的に言つと書いてる最中に妹が更新を押して全部パーになつて考えられなくなったことだな

アレは見てて痛々しい後ろ姿だったぜエ・・・笑いがとまらねエさて、大会終わってから後夜祭みたいなコトするみてエなんだが・

・

拓也

「なア、ユウナア・・・なんで俺の腕をへし折ろうとしてんだア？」

ユウナ

「いや、私達とはいかねえのに明日菜達と歩いててむかつと来たとかじゃないから・・・

なあ？エヴァに千雨？」

エヴァ

「ああ、そうだな・・・別に楽しみにしてたとかじゃないから別にいいんだけどな」

千雨

「そつだぜ？別にきにしていなからな？」

ミサカ

「そうですよ？とミサカは本心を隠しながら言います」

拓也

「つつたつてよォ・・・仕事だったんだからしょうがねエじゃねエか」

ユウナ

「へえ・・・女子中学生と遊ぶのが仕事ねえ・・・？」

- ガチャン -

真名

「お邪魔するよつて・・・本当にお邪魔かい？」

刹那

「真名・・・やっぱり、後にしたほうが・・・」

拓也

「すまねエが、こいつ達に依頼のコトいつてくれ・・・流石にこいつ達ケガさせたくねエし・・・」

刹那

「なんというか・・・え・・・まあお嬢様を護衛してくれてありがとうございました」

拓也

「ン・・・缶コーヒーは？」

刹那

「えゝこれぐらいで良いですか？」

拓也

「ン・・・コレだけありゃ一週間は保つなア」

真名・刹那

「「・・・これで一週間？」」

ユウナ

「ucci・・・本当に依頼だったんだな」

拓也

「だから言っただじゃねエか！依頼だって何回もよオ！！」

真名

「取り敢えず失礼するよ」

刹那

「お邪魔しました」

拓也

「氣イつけるよオ・・・今日疲れたしもオ寝る」

ユウナ

「あのゝ・・・」

拓也

「ンだよ？」

ユウナ

「後夜祭いかな」

拓也

「いかねエよ・・・武道会したり、バスケットしたり・・・」

もオ拓也さんのHP5004ありや良い方だぜエ？」

ユウナ

「・・・（ウルウル）」

拓也

「ッグ・・・そんな目したって・・・」

ユウナ

「・・・（ウルウルウル）」

拓也

「あア！もオ分かったから！行くから！」

ユウナ

「・・・（ッグ）」

千雨・エヴァ・ミサカ

「「（ッグ）」」

拓也

「テメエ達・・・」

ン？後夜祭は？って其れはまた今度だ・・・番外編としてマジメに作り出してやがるからなア

取り敢えず1年目はあと日常編を残すだけ・・・波乱の2年目は薬味が来たり

クズの転生者が来たり、ちょっと英雄がお使いに来たり・・・え？一つ変なの混じったって？

まア、見逃してくれ・・・

ソコで、聞きたいことが数個あるンだが・・・二年目・・・

パワプロでいう成長期なンだが・・・大戦に行くか、魔帆良でgdるかってのが一個だ

ンで、もう一個は・・・

先生になつて良いのかア？数学の先生になるんだが・・・
適当に店（万屋）をだして適当に過ごすつてのもあるんだが・・・
なるとしたらアレだなア・・・超能力先生タクヤ！？て感じかア？
まア、なにもこねエなら好きにさせて貰うが・・・
期限は1年目の日常編ラストまでだア・・・よろしく頼むぜエ

最近の学校スゲー・・・後編（後書き）

てな訳で・・・割とマジメに悩んでいます・・・

大戦行くか現代でgdるか、先生なるか万屋でgdるか

まあ、基本どっちでもいいんですが・・・

ネギま！？を初めて見たのは大戦期なんですよww

中途半端に見て面白い思って・・・

書き始めたんで・・・ナニも来なければ現代でgdって万屋でgdります

では！次回もよろしくおねがいしますね！

新キャラ登場でまさかの転生者！？

拓也視点

おお、どオモ！良いコトして気分が良い哀川拓也だぜエ！
・・・え？何をしたのかって？

人助けだぜエ・・・変なおっさんから助けてきたぜエ
え〜と・・・名前が確かなア・・・時雨彩華だった筈・・・
まア、いまいち名前は覚えてないんだが・・・

で、変な親父が絡みついてて女性がイライラしてたから・・・ぶ
ン殴ったぜ！

3m位飛んだかなア？

さて、てな訳で・・・日常編スタートだア

拓也

「さて、ユウナよ・・・」

ユウナ

「何だ？」

拓也

「一緒に一狩りいこぜ！」

ユウナ

「・・・どうした？いきなり・・・」

拓也

「いや、某ニコ動の女性実況者見ててやりたくなっただぜエ」

ユウナ

「・・・まあ、いいや・・・何行く？」

拓也

「なら・・・ジエン行こうぜエ・・・的的な意味で」

彩華視点

あ、どうも。初めましてよね？時雨彩華よ

一応転生者やってるわ、最近一方通行に似た人に助けられてね・・・転生者だとは思っただけど、失礼だし聞かないわ

私の経緯を言うと

普通に病気で逝く　へんてこな神にあう　生き返らせられる

で、能力が御坂美琴のレベル1だったわ

八年かけてレベル5迄なんとかあげただけど・・・

へんな神が今になってなんか絡んできて・・・もの凄く触られて気持ち悪かったのよ

そしたら最初に言った一方通行に似ている人に助けて貰ったの
もの凄く格好良くみえたわ・・・まるで対一方通行戦そげぶだった
しね・・・

彩華

「はあ・・・高校めんどくさいわね・・・よし！さぼろう」

白

「どうしたんですの？、お姉様」

彩華

「もう、さぼるわ・・・後、お礼言ってくるわ」

白

「・・・殿方に会いに行くのですね？お姉様・・・」

彩華

「ん？まあそうなんだけど・・・取り敢えず言ってくるわ」

拓也視点

拓也

「ジエンエ・・・」

ユウナ

「八回行って一切やられなかったな・・・」

・コンコン・

拓也

「出てくるなア」

ユウナ

「おう」

・・・誰だろオカ・・・

まア、万屋に依頼だろオけどなア・・・

拓也

「はい、コチラ万屋・・・って、あん時の娘かア・・・」

彩華

「さつきは有り難うございました」

拓也

「いやいやア別に気にしなくても良いぜエ」

彩華

「それと・・・失礼ですが、転生者の方ですか？」

拓也

「・・・あア、そオだがア・・・もしかしてテメエは？」

彩華

「ええ、まあどちらかと言えば転生させられた方が正しいですが」

拓也

「敵意はねエよオだし・・・ンで？」

彩華

「唯お礼に来ただけで・・・」

拓也

「・・・ユウナ！ちよっち来やがれエ！」

ユウナ

「ん？」

拓也

「早エなア……」

ユウナ

「いやいや、それほどでも」

彩華

「……転生者パラダイス？」

拓也

「間違いじゃねエけど……うむ……まア、紹介しとくと
ユウナ・スプリングフィールドで俺側の奴」

彩華

「俺側って？」

拓也

「あア……正義の魔法使い共に喧嘩ふっかけた」

彩華

「……え？」

拓也

「ンで、俺側がエヴァ一家、千雨、ユウナ、ミサカ、俺」

彩華

新キャラ登場でまさかの転生者！？（後書き）

てな訳で・・・次回ですb
では！

あゝ・・・ファミチ 食いたいbｙ駄猫（前書き）

てな訳で、どうも駄猫です

拓也

「どオも、哀川拓也だア」

優奈

「どうも、上条優奈だぞ」

TPPのアレ・・・やりはりましたなあ・・・

拓也

「くんのかねエ？夏コミ、冬コミ氷河期ってヤツ」

さあ？僕が出来ることつつたらそんなことに成らないように願うだけだね

優奈

「最悪私たち消えるけどな・・・」

ンで、僕は最悪・・・ま、本当に僕ってば無力だねゝ
だけど、駄菓子菓子イ！連載云々は気にせず続けるぜい！

拓也

「・・・まア、消えるか消えないかは流れに任せる以外ねエしなア」

だね

あゝ．．．ファミチ 食いたいby駄猫

拓也視点

はア．．．どなんのかねエ？日本．．．
あ、どオも哀川拓也だ．．．TPPかア．．．はア．．．
メンドクセエ．．．最悪存在抹消かア．．．洒落なンねエ．．．
さて、まア．．．始めンぜエ．．．

彩華

「ハアハア．．．叫んで悪かったわね．．．」

拓也

「驚かない方がアレだしな．．．」

彩華

「．．．えゝと．．．」

拓也

「つつつか．．．口調崩れてンなア．．．」

彩華

「あ．．．」

拓也

「まア良いンだが．．．」

ユウナ

「んで、アナタは？」

彩華

「あ、私は時雨彩華、彩華って呼んで」

ユウナ

「なら、私はユウナで」

彩華

「分かったわ」

・・・簡単な自己紹介も終わったし・・・
さて、これからどうすつかねエ？

ユウナ

「彩華ってモンハン持ってるか？」

彩華

「え、ええ・・・でも急ね・・・」

ユウナ

「いや、ついさっきまで拓也とモンハンしててさ・・・
ジエンは唯の的だし、何か違うの行こうと思ったんだけど・・・
二人だと時間かかるしな」

彩華

「今持ってるからやろうかしら・・・」

拓也

「ならアマツかアルバ行くかア」

・てな訳で、モンハシーンはカット! -

拓也

「さて、やり終えたんだが・・・何故彩華はしななつかたのによオ・
・」

ユウナさん・・・君・・・何故に乙ったんだね？」

ユウナ

「さて・・・なんなんでせうか？」

彩華

「ま、楽しめたんだからいいじゃない」

ユウナ

「彩華あ・・・」

・ガシッ -

彩華

「あ・・・ヤバイ・・・可愛すぎるわ・・・」

拓也

「・・・まアいいか・・・」

「ガチャッ」

ミサカ

「ただいま。とミサカは帰ってきたことをアピールします」

拓也

「おう、お帰り」

彩華

「お邪魔してるわね・・・ってアナタがミサカさん？」

ミサカ

「ええ、そうですが。とミサカはコイツ誰なんだろうと頭をかしげながら返答します」

彩華

「（プチッ）初めてよ、拓也から話を聞いたの、私は時雨彩華よ」

ミサカ

「ミサカはミサカ特別号です。とミサカは目の前にいる多分ビッチに自己紹介します」

彩華

「（プッチーン）・・・アンタってヤツはあああああ！?!?!?」

拓也

「・・・今のはミサカが悪イな・・・」

ユウナ

「・・・もの凄く激昂してるな・・・ミサカは何であんなに挑発して・・・」

ああ、なるほど・・・彩華も電気使いなんだ・・・しかも超電磁砲ときた・・・」

拓也

「さて・・・ユウナ、逝ってこい」

ユウナ

「あいよお・・・気は乗らねえけどな・・・」

- ユウナの戦闘停止的そげぶ迄・・・カット -

彩華

「痛いわよ・・・ユウナ・・・」

ミサカ

「痛いです。とミサカは殴られた所をさすりながら痛いことをアピールします」

拓也

「・・・しょうがねエだろ・・・」

ユウナ

「殴った私の手だって痛いんだぞ？」

彩華

「うゝ・・・」

拓也

「っぐ・・・」

ヤベエ・・・不覚にも萌えた・・・

アレだよな・・・美人がうゝって狡いよな・・・マジで鼻から愛が溢れそうになったよオ

次回に続く・・・

あゝ・・・ファミチ 食いたいby駄猫（後書き）

てなわけ〜暇だぁ・・・だから更新ですw
取り敢えずまた次回です〜・・・では！

番外編 ゲームセンターTY（前書き）

今回は戦闘少ないんで疑似戦闘です・・・
本編には全く関係無いです

番外編 ゲームセンターTY

拓也

「はい、どオモオ哀川くんこと哀川拓也とオ」

ユウナ

「上条さんことユウナ・スプリングフィールドです」

拓也

「取り敢えず、今回俺たちがするゲームはコチラア」

ユウナ

「『とある魔術の禁書目録』（とあるまじゆつのインデックス）は、鎌池和馬によるライトノベル『とある魔術の禁書目録』を原作とするキャラクターゲーム

シエードが開発し、アスキー・メディアワークス、角川ゲームスから2011年1月27日に発売、

販売された3D対戦型アクションゲームだ」

拓也

「そんな訳で早速プレイをしたいと思いますぜエ」

ユウナ

「取り敢えず対戦をランダムのカラクターでやるぞ」

拓也

「因みに、俺は一方通行使い」

ユウナ

「私は当麻だぞ」

拓也

「取り敢えずセッティングまで、カット！」

駄猫

「ねえねえ、僕にもさせて・・・僕のなんだからさ？」

拓也

「・・・」

ユウナ

「・・・」

駄猫

「畜生！僕が何か悪いコトしたかコンチクショー！

・・・もういいよ、一人でモンハン3rdをブーメランでやってやる！」

拓也

「はい、セッティングも完了したんで、哀川オオオオン！」

ユウナ

「同じく」

- カチッ・・・ウィイイイン -

拓也

「てな訳で、取り敢えず・・・っと」

ユウナ

「うし、先ず対戦だな」

拓也

「おう」

ユウナ

「何がくるんだろうな？」

拓也 - 上条当麻 -

ユウナ - 一方通行 -

拓也

「・・・なんつうか変な感じなんだが・・・」

ユウナ

「・・・確かな・・・」

拓也

「・・・取り敢えず、レッツパーティー！」

一方通行

『さつさと失せるオ』

当麻

『・・・最強・・・ッ』

打ち止め

『アナタが勝てますように・・・ってミサカはミサカは祈ってみる』

・レディ・・・ゴー！・

当麻

『オラア』

・キイン・

一方通行

『其処オ！』

・ズガガガ・

拓也

「うおオ！？いきなり反射とかやってらんねエよ」

ユウナ

「いつもお前は無双してるけどな・・・」

一方通行

『あはア！』

当麻

『効かねエよ！』

- ピキイン！ -

当麻

『オラア！』

- バキッ -

一方通行

『グフッ・・・』

当麻

『ヨッ・・・ハッ・・・トオ！』

- ガンガンガン -

一方通行

『グフツ……』

拓也

「よしよし、押すぜエ!!」

ユウナ

「ツチィ……最強の癖に使いつれえ……」

拓也

「そオか？」

ユウナ

「つち……」

当麻

『ほらよ!!』

一方通行

『其k……グフツ』

禁書目録

『スフィinksウ!!』

一方通行

『オラァ・・・アハァ!!』

・ズドン・

当麻

『ガハァ・・・』

一方通行

『コイツでどオだァ!? ちょこまかと動きやがって・・・』

当麻

『ハァ、トオ!』

一方通行

『グフツ・・・』

当麻

『先ずは、その幻想をぶち壊す・・・ッ!』

・バキッ・

・K・O・

拓也

「よし、勝ったァ」

ユウナ

「・・・ハア・・・」

拓也

「てな訳で、今回のゲームセンターTYは終了です・・・ではア！」

ユウナ

「負けっ放しは主義じゃねえ・・・もう一回だ！」

拓也

「アイアイ」

駄猫

「・・・よっしゃ、ブーメランでイビル倒せた・・・」

番外編 ゲームセンターTY（後書き）

てな訳で、今回はシヨボイ番外ですw何故かPVが16万超えたんでw

拓也

「・・・なア、あの後何回も対戦挑んでくんだが・・・」

知るか、俺は唯一人でブーメランで頑張ってたんだもん

拓也

「・・・」

ユウナ

「早くきやがれ拓也あああ！」

次回は明日かな？・・・では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033u/>

哀川くんのネギま！？戦記

2011年11月20日11時31分発行